
Desperado World

v B L A C K v

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Desperado World

【Nコード】

N5486U

【作者名】

vBLACKv

【あらすじ】

「世界が滅んで、その滅んだ世界が憎くて・・・」
そう言った少年は世界を旅し始める。

死んだ両親の為に仲間を増やしつつ
荒れ果てたこの地球を

プロローグ（前書き）

登場人物

ベレス…世界を旅する少年、よく女の子に間違われる

マーモット…黒いコートを着た綺麗な姿の少女

プロローグ

2700年 1月 1日

世界は戦争で滅んだ、ほとんどの生物が死滅し川は汚染され森から木々が

消えて砂漠化していった

滅んだ世界に残ったものは人が作った建造物や兵器だけ

世界は滅びたが人間が死んだわけではなかった

この荒んだ世界では秩序はない、秩序がなくなった世界では略奪や殺人なんでもあり

そうでもしないと生き残れない、生きていけない。

ことの発端は700年前に日本で秘密裏に行われた科学実験だった
その実験の目的は【楽園】を作ることその【楽園】をめぐる戦争
が起こったのだ

いまとなつてはその【楽園】がなんだったのかだれも解らない。

2900年 1月 1日

僕は両親を失った、秩序がないこの腐敗しきった世界じゃ誰かが死んだ殺されたなんて

良く聞く話だった、だけど自分の肉親が死んだとかだと大分意味が違ってくる

信じたくない、嘘だ、嫌だ、そういう感情がこみ上げてきて何がないんだか

わからなくなつて苛立ちと憎しみが出てきたりする 両親は殺され

たんだ。

「うわあああああ！！！！」

叫び声をあげて走る・・・この時はそうするしか出来なかった。

数日後

走りに走ってかつて渋谷と呼ばれた町の跡地に踏み入った
もう自分にはなにも残されてはいない、守ってくれて愛してくれる
両親もいない
ただとぼとぼと下を向いて歩いた、バンっという音と共に自分の体
がはじかれて
しりもちをつく。

「いたた・・・」

「讓ちゃんどこ向いて歩いてんだ？・・・」

屈強そうな男が僕の目の前に立っていた、鋭い目つきで僕を睨み付けてると

銃の銃口を僕の額に押し付けた・・・僕もきつと殺されるんだけど最後に言いたい事があった

それは・・・この世で最も許せない事の次くらいに許せない事”讓ちゃん”

「讓ちゃんじゃありません！！僕は男ですから！！」

「ええええ!! お前いまの自分の立場わかってる??? 俺! 今銃でいま殺そうとしてるんだよ!」

「この世で最も許せない事の次くらいに許せない事を言われたもので・・・」

ズダーン!! 轟音が響く撃たれた・・・? どこも痛くない??

男が僕にもたれかかるようにして倒れる。

「く・・・そ・・・こんなところで・・・」

火薬の臭いがする方向を向くと黒いコートを着た人が立っていた手には銀色に光る銃が握り締められ煙を立てている・・・あの人が助けてくれたのかな?

僕に近寄って男の死体をどかしてくれた。

「大丈夫? お譲ちゃん」

「お譲ちゃんじゃねえです!! 男です!!」

今日で二度目のこの世で最も許せない事の次くらいに許せない事を言われた

だが助けてくれたお礼はするべきだ、ありがとうと一言告げるぐらいはいは

僕にもできる。

「ありがとう・・・あの名前は?」

「マーモットよ、あなたは?」

「ベレス・・・」

お互いに名前を名乗った彼女は銀髪で体のほとんどを黒いコートで覆われていた

コートの中にある胸に興味が行ったがいまはそんなことを考えてる場合じゃない

・・・でかい・・・いや違う落ち着け僕の煩惱・・・

「あなた武器も持たないでここで何してるの？」

「・・・」

痛い一言だった、確かに何しに来たんだろう両親を殺されてやけになって走って走って

こんなところに来て・・・なにをするつもりだったんだろう

「家まで送ってあげるから案内して」

「うん」

この出会いが世界を変えるなんてこの時の僕は思いもしなかった

プロローグ（後書き）

いやあ書き綴ったらまた夜ですよ W W W
ああつかれたあまた次回で W W W

これからどうしよう・・・(前書き)

登場人物

ベレス..世界を旅する少年、よく女の子に間違われる

マーモット..黒いコートを着た綺麗な姿の少女

これからどうしよう・・・

マーモットと名乗った彼女は無償で僕を家まで送ってくれるようだ
家はまでは数日間もかかるのに無償とは優しい人だな。

このかつて東京とよばれた廃墟はかつてとっても栄えていた形跡がある

高いタワーが立っていたり、洋服店があったり、工場があったり
当時の状況がそのまま残っている。

中でも工場に残ってるガラクタは最高だ、なんて思うのはおかしいかな？

僕の親はガラクタを使って武器をつくったり、生活に便利な機械を作ったりして

それを売って生活をしていた、その親の影響のせいかな・・・

とてもガラクタは放っては置けない、ガラクタを使って何かを作りたくなる

「マーモット・・・ちょっと寄り道がしたい」

「なに？」

工場の入り口をくぐって入ると、くず鉄の山が目に見え込んだ
人はこれをくず鉄の山としか言わないだろうけど僕にとって見れば
宝の山で、すかさずその山に飛び込んで金銀財宝をかきわけるように
泳いでみたくなる。

僕は鉄パイプを溶鉱炉の熱を使って暖めそれを
そこら辺にあったハンマーで薄く平べったくし、形をある刃物に似
せて作った

刀だ、刀は銃とは違って飛び道具ではない標的を切断する近距離戦

闘武器で

とっても便利だ。

「できたあ!!」

「なに? それ・・・新しいおもちゃ?」

今すぐこの女をぶった切りたくなるような一言だが抑えた刀を侮辱すんな、チクシヨウめー!! っと腹の中で叫んだ。

「えーと、あとは鞘があればいいんだっけ?」

鞘もそこら辺のガラクタを使って作ろうと思ったけど残念、ガラクタの中には木材はなかった。仕方なく鉄で鞘を作ることにした。

「完成したの? んじゃいこう」

「うん・・・」

工場を出ると夕日が空に輝いていた、とっても暖かい。

世界は滅んでも季節は生きていてこの寒い季節では太陽の光が唯一の暖^{だん}

とでもいえる。

歩き続けて日が沈んでまた日が昇ってこれが何回か繰り返されると僕の家に着く・・・家に着くとある事を願ってしまうそれは両親が生き返ったもしくははすべてが嘘であった・・・

「ベレス・・・私はもう行くけどここでいいの?」

「うん、いいよ大したお礼も出来ないけど本当にありがとう」

家の玄関のドアノブをひねって入る

なにも変わってない、変わらない、当たり前のことなのに願ってしまった

ひどい腐敗臭が鼻を突く・・・両親の体に蛆が集っていた。

どうしてこうなった・・・答えは一つ世界が悪いんだ・・・

「世界が滅んで、その滅んだ世界が憎くて・・・」

数日後

家のガラクタで出来るだけの武器を作ったぼろぼろの戦前の雑誌を
読んで戦い方を学んだ。朝日がまぶしく僕の目を刺す旅に出るには
いい日だ

そして最後に家にガソリンをまき火を放った両親は家のベッドの上
に二人揃って

寝かせてあげた、約16年間僕を育ててくれてありがとう

そのお礼にしっかり生きるよ、生きて生きた証をこの腐った世界に
しっかり刻む。

また会おう。

さてこれからどうしよう・・・世界に生きた証を残す為には・・・

水鏡が僕の顔を写してる。

これからどうしよう・・・(後書き)

旅にでたい
W
W
W
W

そうだ、助けなきゃ（前書き）

登場人物

ベレス..世界を旅する少年、よく女の子に間違われる

マーモット..黒いコートを着た綺麗な姿の少女

そうだ、助けなきゃ

前回までの簡単なあらすじです。

両親が死んで現実逃避してマーモットっていう女の子に助けられてお家を火事にして旅に出る事にしました。

マーモット・・・そういえば彼女どうしてるかな・・・
また会えたらいいなあそんなことを考えながら歩いていたらあつという間に

夜になってしまった旅をはじめてから、はじめての夜だ

「今日はここで野宿しようかな」

現在地はかつて千葉と呼ばれた土地ここは戦争の影響をあまり受けなかったらしい

なぜかという人口も少ない上大した特産物もなく兵器の製造も行われていなかった

らしい、故に敵国から攻められる事もなく完全にスルーされていた、だが

ここ数百年で環境は悪化の一方をたどってる畑があった場所はただの砂場のように

見える、そして朽ちた家が何件かある。

「世界はどこもかしこもこうなのかな・・・正直お先真っ暗だ」

夜、初めて自分の寢床以外での就寝ダニやノミにさされることもないだろうけど

やっぱり初めてだと不安がいっぱいだ体の底から冷氣がでて来るような感覚に襲われる

慣れない・・・この一言で済めばいいのだろうけど、わからない感覚がそこらじゅうから

自分を刃物で刺しているような気もする、多分不安なんだろう。

「眠れない・・・よしイメージディフェンスだ!!」

イメージディフェンスとは僕が以前一人で留守番してて不安になったとき

考え出した不安を打ち消す方法だ。

効果はそれなりにあるこのやり方はおそらく誰もが一度は思いつくだろう

簡単な現実逃避なのだ、なにを想像しようか悩みだす

家族なんてどうだろう・・・両親が生きてたころは本当暖かい生活を・・・

ああ・・・なんでだろう目から汁が・・・

「逆効果じゃねえか!!」

自分で思いつきり声を出して突っ込む、なにやってんだろう僕・・・
そういえば殺した奴って誰だ？あの時は確か僕がガラクタで遊んで家に帰ってくると

二人とも頭に銃弾が通った後があって家を荒らされた様子も無くて・・・

なんだ段々イライラしてきたよ、なんの目的で殺したんだろう
なんで殺されなきゃいけなかったんだ!!お父さんとお母さんが何

をしたっていうんだ!!

「きやあああああ!! やめてええええ!!」

突然叫び声がした、なんだ何かあったのかな? いまの声どこかで聞き覚えが

まさかマーモット・・・?

そうだ、助けなきゃ あの時助けてくれたみたいに助けなきゃどこにいるんだろう声のした方向を向いても暗くてよく見えない家にあったガラクタで作った暗視ゴーグルを使ってあたりを見渡すこの暗視ゴーグルは暗闇を見えるようにするだけでなくズームも可能。

約80m先の公園跡地で火が灯っているのが見える

マーモットの姿と回りに数人の人間

マーモットはロープで縛られていて身動きが取れないようだ・・・
周りの人間はどこの世紀末だといったくなるようなカッコをしている

モヒカンとか漫画や雑誌でしか見たことが無い。

ズダーン！！

一人の人間が首に銃弾を受けて倒れる

「あぁん？おいどうした！！・・・チクショウ敵だ！！」

狙い道理だ・・・あとは3人か、こっちには暗視ゴーグルがあるんだ
負けるわけが無い、ましてや暗闇に隠れてるんだから
よしもう一人に狙いをつけられたこのままトリガーを絞る。

ズダーン！！

モヒカンヘアの奴の眉間に銃弾がえぐり込んで貫通する
頭から血しぶきを出して倒れる

「また一人やられたぞ！！どこからだ！！」

残り二人か・・・刀で仕留めてやろう、鞘から刀を取り出し一気に走りだして行く。

「そこか!!」

銃口をこちらに向けるが遅い腕を刀で一刀両断、断面から血が吹き出る
返り血が顔にかかる。相手は出血のショックで気絶放置すれば死ぬだろう

「最後の一人ですね、あなたが」

「・・・なんだお前・・・なんの恨みがあって」

恨み? そんなものはないただ彼女を助けたいだけで・・・助けようとするだけで

僕はこんなに強くなれるのか、すごい人間で。

「・・・うわぁー殺さないでくれえ!!」

「昇○拳!!」

しゃがんだ状態から飛び上がって拳を打ち出す必殺技の名前を叫ぶ

「おいやめろ!」

マーモットが空気を読んでそのセリフを一言僕にいった。

彼女のロープを解く彼女は立ち上がって肩をまわして慣らす
今度は助けられたねと言。

「なんでこんなところに？」

「・・・偶然通りかかったただだよ」

なんで嘘をつくんだろう僕・・・素直に親が死んだことを話せばいいのに

「以外に強いんだね！見直したよ」

雑誌にあった護身法の応用だけだね・・・

彼女は良くこのあたりを探索している事を話してくれた
探索している理由はかつて戦争の引き金となった化学実験”楽園”
の手がかりを
探しているからだそうだが、だけど今となってはその真相や目的を
知る者は

いないと言われていたのだが、つい最近になって解った事があるらしい

その解った事というのは、”楽園”自体が装置としての段階で日本国外に持ち出されたという事だった、ちょうどこの土地の海九十九里浜という砂浜からだ。

”楽園”は簡単にいえば起動してしまえば世界が豊かになる装置らしい。

正直いまの僕にはどういう意味かわからない、解ってるのはひとつ悪い奴の手に渡せば富が独占されるってことらしい。

「わかりくいー・・・」

「ならこう想像してみても戦争の引き金は楽園の独占、独占されたら普通みんな欲しがるでしょ？」

「うん、僕も欲しいなそれ」

「けど日本は楽園を渡さなかった、人間平等っていうのを信じてる宗教とか

昔はあったらしくて、それが大まかな戦争の発端なんじゃないかと思ってるんだ私は」

「へえー」

「だからしかるべき機関にちゃんと託すべきだと思うの」

機関なんてあるのかこの世界？そういった疑問が少しだけある
だけど腐敗しきった世の中に名前を残すならこれいい目的になるん
じゃないかなと思った

僕は彼女についていく事にした。

「着いてくるのは自由だけど・・・」

「なにか問題でも？」

「私の所属してる”機関”にまずはいきましようか」

”機関”？本当にあるの？」

僕の疑問を無視してマーモットはすたこらと歩き出す。

そうだ、助けなきゃ（後書き）

・・・なんか描いてたら疲れてきて後半おっぺけぺって感じになっ
てもうたW W

あーいつか修正しようW W W

復讐ってなにか残るの？はい残ります（前書き）

【お詫び】

操作の不良により一度すべての文が消えてしまいました
バックアップも手元になく一から書き直しという形をとらざる負えない

状況です、本当にすみません

登場人物

ベレス…世界を旅する少年、よく女の子に間違われる

マーモット…黒いコートを着た綺麗な姿の少女

【ギルド】…無秩序を楽しむ集団

【機関】…詳細不明、楽園を追い求める

復讐ってなにか残るの？はい残ります

この世界は戦争で滅んで以来、無秩序だ…

無秩序である故に人が死んだ、殺された、そういった話はよく耳にする

略奪、強盗、陵辱、そういったものが今の世界では当たり前。

ただし例外があるそれは「残される」ということだ

親戚や肉親、友人を失えば当然人は悲しむ

そして失ったり理由が殺害であった場合悲しんだあと憎しみがこみ上げて

殺した者に復讐心さえ芽生てしまう、それはおそらくはこの世界でもっとも恐ろしくて

醜くてひどいものだ、だが皮肉にもそれが唯一無益な殺人の抑止力となる。

僕も両親を殺され「残されたのだ」

体をだるそうに引きずる一人の男がいた。

彼はベレスに戦前流行ったとされる、某格闘ゲームの必殺技を受け

て気絶【昇○拳！】

同時に仲間を殺害され彼もまた「残された」一人となった。だが彼にはもっと多くの仲間がいた、それはこの腐敗しきった無秩序の世界を楽しもうとする集団【ギルド】だった。

【ギルド】は星の数ほど存在するが彼の所属している【ギルド】は結束力が高く

やられたら、やり返すが掟の無法者の集まり。

「残された」彼はその【ギルド】へ向かいベレスの事を告げる

「なああにいい！！女一人にやられただとおおお！！」

首相らしき体格の良い強面の男が憤怒し叫ぶ

報告をした彼の体はすこし震えている、強面の男は一度落ち着くと空に向けて銃を撃つ。

すると周りの影から、人々が集まり強面の男の前に集う。

「女の特徴を言え！！」

「はい！！赤毛で刀を背負っていて、ついでに口径がかなり大きな銃を持っています！」

首相は全員に戦闘準備を整えさせるベレスを討つ為、その数約五十。

「はつくしよん…うー」

誰か僕の噂でもしているのだろうか？

マーモットに連れられやってきたのは、かつて九十九里といわれた砂浜

生で海を見るのは初めてのことだったので、すこしわくわくしていた。

しかしそれと同時に不安もあった昨日のような、無法者たちに出会ったら

今度はうまく行くとは限らない、しくじればそのとき僕に残されるのは
死だけだ。

マーモットが砂浜に着いたと言ったので、前方を見渡す

：違う想像してた海とまったく違う、戦前の雑誌では青く透き通った海の写真が

載っていたのだが…これもまた世界が滅んだ、戦争による汚染なのだろう

僕はがっかりしてひざを落とす。

「そんなぁ…これが海？」

「そう…これが戦争で汚染された海、この国は昔から漁業が盛んだったから

魚が取れなくなれば生活が苦しくなると思って敵国は海を汚染したの」

汚染された海水はひどい臭いで、人が長い間浸かっていると、死に至らしめることすら

できてしまう、とても恐ろしいものになっていたのを僕ははじめて知った。

ふと気づくとマーモットはなにやら考え込んでいた。

「“楽園”を運び出した奴らはどうやって海を渡ったんだ？」

言われて見れば確かにそうだ、汚染された海を渡るなんて自殺行為そのもの

にとっても近い。

しばらくするとマーモットはここから遠くの、砂浜に何かを見つけ
たようで

そこに走って向かっていった、僕もすぐに後を追う。

「穴だわ」

「穴だね深さ大体3m綺麗な円柱の穴、直径は結構ある…
もしかしてシールドマシン？」

「なにそれ？」

「戦前にトンネルを掘る作業に使われた機械だよ”楽園”は
きつと穴を掘って海の底の底を渡っていったんじゃない？」

「それしか考えられないわね」

マーモットはよくやったといって僕の頭を撫でてくれた
ちよっぴり恥ずかしいけど悪い気分じゃない。

「さて、あとは【機関】に報告しにいくか」

「【機関】 ってどこら辺にあるの？」

「東北よ」

「遠!！」

それでも今はそこに向かって歩き出すしかない。

「ボス！！例の女です」

一人の男がベレスの姿を双眼鏡で見つける、そしてその双眼鏡をボスといった人物に渡してベレスの姿を見もらう。

ボスといわれた人物はベレスの姿を双眼鏡で確認するといきなり「考える人」の銅像のようにカチカチに固まって動かなくなってしまう

周りの仲間たちが心配して声をかけるが、無反応…ピクリともしないのだ

だが次の瞬間彼の口から思わぬ一言が飛び出た。

「か、かわいいな…」

「ええええええ！！」

周りだけが一瞬氷河期の様に凍りついた、ボスと呼ばれた彼は完全にベレスに

見とれていた、しばらくたって周りの仲間に戻ろうと声をかけようとした時には

仲間たちは彼に幻滅して消え去ったという。

「はつくしよん…視線を感じます…あと僕は男です、はい。」

復讐ってなにか残るの？はい残ります（後書き）

なんか誤字を修正しようとしたら

丸ごと消し飛んだ、本当にすいません

復讐ってなにか残るの？はい残ります その2（前書き）

登場人物

ベレス…世界を旅する少年、よく女の子に間違われる

マーモット…黒いコートを着た綺麗な姿の少女

ガレット…【ギルド】のボス、とっても怖い顔をしてる筋肉ムキムキ

【ギルド】…無秩序を楽しむ集団

【機関】…詳細不明、楽園を追い求める

復讐ってなにか残るの？はい残ります その2

両親が死んで二週間が経とうとしていた、今の目的は旅をして
”楽園”を探す事、それともう一つ：両親の仇を取る事。

楽園へつながる手がかりを入手した僕は、マーモットの言う【機関
に

その手がかりを報告しなければならない、ここからかなり遠いと思
われる

東北地方に行かなければならない。

「つかれた・・・」

「なにいつてるのベレス？まだまだ遠いのよ目的地は」

疲れてしゃがみこむ僕の手を両手で引っ張りながらマーモットは進
もうと

足をを動かし続ける、痛い：肩が外れそうなので観念してたって進
む事にした。

しばらく経つとかつては工業地帯だったのだろうか？工場しかない
場所に出た。

「HEY！！その赤毛のお嬢ちゃん、旅のオトモには俺みたいな
のが必要だろ？」

：だれだこの人は、確かお母さんが知らない人についていったらダ
メだって

僕が小さい頃に教えてくれた、見ないフリしよう。

「あんた、だれ？」

プギャー！！マーモットなんで答えちゃうんだよー！！この馬鹿チン！！

そんな筋肉ムキムキで強面の人なんて僕は関りたくないんだよー！！

「誰？ってそりゃ俺だよ」

「名前聞いてるんだよ」

「ああ、名前ね！ガレット」

ダメだもう逃れられない…なんで誰とでも会話しちゃうんだよマーモット

相手を選ぼうよ本当に…もう、仕方ない。

「あのお…僕たち先を急ぐんで…それじゃ」

「僕娘^{ぼくっし}キター！！」

え、なに、僕娘って…まさかこいつ僕に対しておち嬢^{おちじょう}なんて言ったのか？

「そうだよ、ちゃんと”赤毛”のお嬢ちゃんって言ったじゃん」

「人の心を読みやがった！！ダメだこいつ…はやくなんとかしないと」

僕は身の危険を感じたと、同時にこの世で最も許せない事の次くら

いに許せないことを

言われたので戦闘体制に入る、刀を鞘から抜き取りその変態に向ける。

「おお辛口も好きだぞ、オトモに相応しいか試そうってんだな！」

「試す？なにを言ってるのかな？僕はあなたを殺そうとしてるんですよ」

「へ…」

本気で全力疾走して切りかかる……いない！消えたどこに！後ろか！もう一振り！！また避けられた！

「太刀筋荒いな、嬢ちゃんそれじゃいくら早くたって避けられちゃうぜ」

「…さっきからち嬢ちゃん嬢ちゃんって僕は男です！！」

「…え？」

よし今だ、僕はガレットの一瞬の硬直状態を見逃さず容赦なくぶつた切った。

…ぶつた切ったはずだった、手元が狂ったか？峰打ちになってしまった

峰打ちとはいえ頭から思いっきり入った、ガレットは僕の目の前で目を回して倒れた、気絶のようだ。

「ベレス…こいつどうするの?」

「放置プレイでいいよ」

「そう」

僕とマーモットは先を急ぐ事にした、二度と現れんな!!

視界に夜空が写りこむ、目が覚める…頭が激的に痛い、あれ？あの
子はどこだろう？

あの峰打ちは効いたぞ…いったいあんな細い腕してどこにそんな力が
…糞、嫌われたかな？やっぱ顔が悪いのか？

「なにやってんですか”元”ボス」

どこかで聞き覚えがある声がある、それに元ボス？

「お前…元ボスだと？ふざけてるのか？」

「やれやれ嫌だな俺たちの掟忘れたわけじゃねえだろう」

俺たちの掟それは「やられたら、やり返す」っは、そうだ！！
そうか俺は掟を破ってしまったんだ、何てことだ。

「いまさら思い出したかよ…おい皆こいつに掟を破った奴がどうなるか
教えてやろうぜ！！」

つく！！まだ峰打ちのダメージで体がふらつく！！
それにこの数、ダメだ！やられる！！

ズダーン、どこからか銃声の轟音が響き渡る目の前の男のこめかみ
から血が噴出す
そして倒れる…まさか！

「私がベレスを説得したありがたく思ってね」

「僕はあなたをまだ認めたわけじゃありませんからね！！」

なんだ二人とも戻ってきたのか良いタイミングできやがって
だが赤毛の子は男だ…だが、男だ…されど、男だ…

”男ならほれた人間最後まで愛せ！！”どこからか声が聞こえる
この声は…誰だろうわからない、だがこの声の言うとおりで男なら

!!

「なんだあの二人は…ああ！あいつだ仲間弾きやがったの！！」

「なにいい！！殺せ！！」

「容赦すんな！！殺害だ！！」

「うおおおお！！！！殺れ殺れ！！」

多数の敵が迫った時最も最善の選択は逃げることだ

多勢に無勢とはよく言ったものだ。僕は思うけど…逃げない！！
自分のせいで人が殺されてしまうことがこの世でもっとも許せない
事だからだ！！

「5、6、7！！こっちは今七人だよマーモット！！」

「こっちは8人!! やっぱ銃だよね!!」

「俺もやるとするか!! お控えなすってえ…あっしは名をガレットと申します

【ギルド】の元ボスであり、掟を破り晴れて縁はズッパリと切れやした

てめえら覚悟は出来てんだろうな」

ガレットは拳を一振りしただけで風がうなりをあげて敵を襲うだがこれは彼の本来の力ではない、峰打ちのダメージがまだ残っているためだ。

「俺が風を起こして、敵を怯ませてるうちに早く!」

「…言われなくても!! 20!!」

「こっちも20よ!!」

残り10人、残党たちはわかっていた戦っても無駄死にするだけだがそんな残党の中の一人が笑い出した。

「なるほど、あの家のガキが確かにこの世界で最も恐ろしいのは「残されることだった」な…いま身をもって知った」

「お前が…なぜお父さんとお母さんを殺した」

残党の一人を残して他の九人はとっとと逃げ出したベレスは理由をきくとすぐ銃に持ち替えた。

「なぜって? 理由なんかねえよただむしゃくしゃしてたんでな!…

……あ、アレエ？なんだ視界が暗い」

「21人僕の勝ちだね…マーモット」

「あ！ずるい！！」

「やれやれお二人さん…見かけによらず強いねえ」

ガレッドが呆れた口調で言う、ベレスとマーモットは笑っていた。

僕は復讐を果たした、復讐って虚しいって言う人がいたけど僕は違った

復讐をして、若干変な人ではあるけど仲間が増えました。

復讐ってなにか残るの？はい残ります その2（後書き）

お風呂に入ってきます…

ガレット「関係ないな小説に」

いきなり番外編…作者出て来いよ（前書き）

番外編の内容がいつもここに載っている事なので
書きません

つまりは詳しいキャラクター紹介をしたいんです

いきなり番外編…作者出て来いよ

【キャラクター紹介のコーナーです、今回はね！】

ではまず主人公からいきましよう。

名前…【ベレス】

性別…男

特技…ガラクタ工作

容姿…ショートヘアの赤い髪に青い瞳、透き通るような白い肌

もはや女の子としか思えない顔立ち、男の娘、16歳くらい

詳しい説明

箱入り娘、もとい箱入り息子な生活を送ってきた為多少の世間知らず
見た目以上に行動力があって善悪の判断がちゃんとできる人間

父母共にガラクタから物を作り出す商人だった為その影響で本人も

ガラクタいじりが大好き、ある日家の外のガラクタをあさっていると

戦前の拳法の巻物や、刀の扱い方の本等を偶然発見。

何に対しても真面目で好奇心旺盛な彼にとってこれは唯一の武器となった

時折雑誌なども集めてくることもしばしば。

三人の中ではツッコミが役割で二人のボケに毎日なぜか奮闘？

マーモットのことを恋愛対象ではないがそれなりに好いている

ガレットに対してはなぜか冷たい、本能？

本人は気づいていないが緊張状態や戦闘時にアドレナリンが過度に
分泌される体質で

常人の数倍の戦闘力を持つ。

名前…【マーモット】

性別…女

特技…銃器の応用戦闘

容姿…常に黒いコートを着用、ロングヘアの銀髪に緑の瞳、美白美人な上巨乳

激しく動く揺れる…17歳くらい

詳しい説明

見かけとは裏腹で天然、うっかり寝込みを【ギルド】の連中に襲われたりした

戦闘時に胸が大きく揺れる、そればかりに気をとられる敵続出（男性限定）

【機関】という謎の多い組織に所属していてこの組織の目的は

”楽園”の入手、入手したあとどうするかは本人は知らずに手を貸している

両親は彼女が生まれてすぐ死んだ為、顔も名前も覚えておらず

自分の本当の名前すらわからないベレスよりも身長が高くベレスをかわいい

弟のように最近は思ってる、人の悪意にやたら敏感で悪意が無い者には

すぐ親しく接するようになる、寝言でよくベレスの名前を言っているのだが

どういうことだああああ！！

【機関】で育ち【機関】がお家。

ガレットとも仲良く接しておりベレスがガレットに何かしたときはなだめてあげたりする事もある。

名前…【ガレット】

性別…男

特技…肉弾戦、腕一振りで暴風が吹き荒れる!!?

容姿…筋肉もりもりマツチョマンの変態だ、ザン〇フ、ジャ〇様

ジャングルでターザン、30超えてるだろ

詳しい説明

とんでもない暴走とおバカを繰り返す、【ギルド】の元ボスで

それなりの戦闘能力があり戦闘時のベレスの一太刀を回避するほど
三人の中で一番強いかもしれない人物、ベレスを完全に女の子だと思っ

て見とれていたら仲間から愛想をつかされてしまった意外とうっかり
さん?

いつも上半身裸で下半身は脱げないのか?とベレスに質問したところ
「脱いだら殺します」といわれてしまい断念。

ベレスの峰打ちのダメージで弱体化しているが、それでも十分強い
マーモットのことを親切な女の子ぐらいにしか思っておらずベレス
が男とわかった

いまでも本気で好きなようだ。実は彼の背後には幽霊がいて
その幽霊が時々彼に語りかけ助言?を行っている、この三人の中で
一番の

ファンタジー人間、幽霊はかつて秋葉原のオタクだった。

三人「作者出て来いよ…殺人タイムだ」

ブラック「…勘弁してくださいあ」

いきなり番外編…作者出て来いよ（後書き）

すいませんでした W W W W

生物的危険（前書き）

登場人物

ベレス…世界を旅する少年、よく女の子に間違われる

マーモット…黒いコートを着た綺麗な姿の少女

ガレット…【ギルド】のボス、とっても怖い顔をしてる筋肉ムキムキ

【ギルド】…無秩序を楽しむ集団

【機関】…詳細不明、楽園を追い求める

生物的危険

工業地帯にて明朝時、9人の人間が全力逃走を終えてしばし休憩なぜこんなことになったかという、無論人間離れした戦闘能力を持つ

あの三人組に挑んだためだった、最初は50人と大勢だったがまったく

歯が立たず数も減って、とうとう9人になったところで、ようやく逃げるという選択肢を選んだ。

「あいつら何なんだ?…」

「知るかよ一人は言うまでもなく元、俺たちのボスで他の二人は?」

「片方はかわいいじゃなくて…小さくてすばしっこい奴だったな」

「もう片方は巨乳…じゃないや、銃裁きが半端なかった」

逃亡した彼らはあの三人組について話す、ほんの数分の出来事が頭の中で何度もループして離れない。

ガタン!!

「なんだ!!」

彼らの一人が物音に驚く、物音のした方向には何もない気のせいかと思ってもといった場所に戻る。

「そろそろ行こうぜ：俺たちは俺たちだけでやっていこう【ギルドとして】」

「そうだな」

彼らは工業地帯を抜ける道を探す、やがて朽ち果てた住宅街にたどりつく

抜け出した喜びと生き残ったという喜びをしっかりと味わう。

ガタン！！ガタン！！

また同じ音が彼らに聞こえる：後ろを振り向く。

「なんだこいつは！！…」

ブシャっという鈍い音と共に彼らは一瞬にして何者かに殺された。

昨日のゴタゴタから数時間がたって僕たちはしばらく眠ることにした
工場の朽ちた狭い小屋でそれと、新しい仲間が出来た。

ちよつと変わっているけど頼れる人、ガレット

いまでも僕に変なことをしようとしたりしてくるけど戦闘時は役に
立ちそうなので

同行を認めてあげた。

そして話がいきなり変わるけどさっきからものすごい苦しいんです…
はいマーモットの寝相が悪くていまヘッドロックされてる状態です
後ろ頭にやわらかい物体が…これはこれでたまらん！！

ジリリリリ！！

なんだろうこの音…うるさいなあ…

「おい二人とも朝だぞ！！目覚ましがなってるぞ！！」

ガレットの持っていた目覚まし時計がなっていたのだ
おいおい明らかお前そういうキャラじゃないでしょ！！
ごっつい体のくせして、そういうの持ってるのか気持ち悪いよ。

「うーん、ベレス朝だって」

「分ってますよー」

不機嫌に返事をした、だってさっきまで心地よい物体が後ろ頭にあったたのに…

残念だなこれもその筋肉モリモリの変体のせいです。

「なんだよ…朝から不機嫌だな、かわいい顔が台無しだぜ」

「気持ちわるいので話しかけないでください」

気持ち悪いと言われたくらいで落ち込んで…本当になんなんだこの敵つい変体は
まあいいか、大人しくなるし…そうだマーモットにこの後の行き先を聞いておこう。

「マーモット次はどこを目指す？」

「住宅街なんだけど…あんまりいい噂を聞かないわ、なんでも”出る”って噂が

あってね…」

なに！？なにが出るの？まさかアレじゃないよね…あの足がなくて空中を常に浮遊する、この世にとどまっちゃいけない存在じゃないよね…

うー怖い怖い、南無阿弥陀仏！！

「ああ、俺も聞いたことがある”出る”らしいな」

「…あのー回り道しない？」

二人にそろって「却下」といわれてしまった、くそー最悪だ

この世でもっとも怖い存在がいるかもしれない住宅街に行かなくちゃ行けないなんて塩とかないかな…

「ベレスもしかしてあなた怖いの？」

「うっ…怖くなんかない…」

「正直に言えよ怖いって、俺の背中貸してやるから」

おお見直したよガレット！やっぱりお前みたいな奴はそういうキャラじゃないとな
安心したせいか、お腹がすいた。

「ふう…ちよつと携帯食料食べさせて」

「あ！ずるい！私も欲しい！！ここ最近にも食べてない！！」

「俺はいらない…」

しょうがないなあ…ガレットは以外と我慢強いんだなあ
僕は携帯食料のハコを空けて中身を確かめる…ん？なんか減ってる

「あ、ガレットの口になにかついてるよベレス」

「貴様ああ…」

「あ、あの夜中ひもじくて我慢できなくてつい…」

ガレットに盗み食いされた携帯食料…仕方なく残りを少しだけマ―

モットと

分けて食べる、携帯食料を手にとってマーモットにあげる

「はい、あーん」

「あーん」

みなさん、俺です…ガレットです、いま目の前でとっても目の保養になることが

起こっています、赤毛の男の娘が銀髪の美少女にあーんですよ…ア
ーん

できれば俺にして欲しかったですがこれはこれで、見てるだけで
萌えます…！！

おお、なんとマーモットの食べカスがほっぺに！！

この後の展開、予想できちゃいますよね…そうです、その想像の通り
であっていると思います。

「あ、マーモット食べカスがついてるよ、動かないで取ってあげるから」

「…うん」

僕は食べかすを手で取って、そこらへんに捨てた。

「おいおいちょっと待てよ！！読者の心を裏切るなよ！！普通ここは展開的に…」

”なにをいつているんだお前は？”ガレットの心の中で某大統領の言葉が

響いた…おそろしい目つきだった、目だけで人を殺せるんじゃないかってくらい

恐ろしい目つきだった。

「さあて行こうか…住宅街」

「やっぱり回り」

「却下だベレス！」

「…」

僕はそれ以上なにも言わなかった…なぜだろうガレットの背後から何かを感じるんだ…鋭い目つきをした何かがいる。

しばらくして小屋をみんな出る、今日もとってもいい晴れだ

これなら間違っても”出る”なんてことはないだろう

工業地帯の地面はほとんど人が作った鉄板がひかれている、歩くたびにカタンカタンと

音が鳴る調子に乗って思いっきりがんがんで見る…音が良く響く反響して遠くまで鳴り響く。

「ベレスうるさいわよ…」

「ごめんごめん」

マーモットから注意を受けてしまった、そんな僕の小さな遊びもつかの間で

あっという間に住宅街についてしまった、着いたと同時に狙ったかのように

曇りだしやがて雨が降り出す…最悪だ最悪の土砂降り

視界も悪い住宅街のコンクリートはところどころひび割れていて気をつけないと

足を引っ掛けて転んでしまいそう。

「ベレス俺の後ろに…」

「後ろは嫌だ…肩車して」

「あ、ああ」

後ろにはさっき何かがいた感じがしたので肩車にしてもらおう

「あーあ制服のコートが台無しね」

「お前の服どこかで見たことあると思ったらもしかして【機関】の人間だったのか？」

ガレットがマーモットに質問をする、以前【機関】について聞いたけど

彼女自身も良く知らないで手を貸しているとかで詳しい事情は話してくれなかった。

今でもとっても気になるなあ…話してくれないかなあー。

「私は【機関】に拾われたのずっと幼いころにね、親は私が生まれてすぐ死んだの

殺されたって言ったほうがいいかな」

「そうなんだーなんか悪いこと聞いちゃったねガレット…」

僕を肩車するガレットが動かなくなっていた…どうしたんだろうん？鼻血が出てる…

「ベレスの太ももやわらかいなあ」

「…この変体マッチョマンがあー！！」

肩車の体制のままガレットの目を思いっきり潰す勢いで指を刺した痛さのあまり動き回って僕を振り落とそうとする、ガレットの肩からスタイリッシュに飛び降りて着地。

「うー相変わらずの辛口男の娘ー、だがそれがいい」

「ほらバカやってないで二人とも行くよ」

「はーい」

雨がよりいっそう強くなってくるマーマットはコートについているフードを被る長い銀髪がフードの脇からはみ出て雨に濡れる

早く止まないだろうか…ガレットは濡れても平気そうだ…

ん？なんだろう雨で出来た水溜りに赤いなかか混じってる、これは血？間違いない血だ…更に先に進むと上半身のない死体が転がっていた

いや無いんじゃない、潰されて原型を留めていないんだ。

「こんなひどい死体初めて見たわ…やっぱりいるみたいねこの住宅街」

「何がいるの…ねえ何が」

「出るんだよ、お化けが…」

やめろおおおお！！死んでもその類には逢いたくないんだ僕は

ガタンガタン

鉄板の音？工業地帯で立てた足音に似た音が聞こえるこんなところまで響くのか？

いやそんな筈はないもう数キロくらい離れてる…雨が少しだけ弱まる数キロ離れた工業地帯の工場の屋根に何かがいる。

もしかして「スパイダー〇ツ！！」そんなわけないだろうと心の中で乗り突っ込み…

「あれはなに…？」

「わからないよお…おー怖い」

「飛んだぞ…！！」

空高くジャンプする謎の物体…やがて見えなくなる

ドクン！！ドクン！！………なんだ？胸が苦しい

あれ？周りがやたら静かだ…いや違う全部ゆっくりだスローモーションになってる

雨の水滴の形がはつきりする僕は動けるのか…？普通に動ける、こんな感覚前にもあったような

確か、戦ってるときだ、似た感覚がする…

「はぁ…はぁ…！！！」

胸がやたら苦しくなっとうやくスローモーションが終わる

「ベレス危ない！！！」

マーモットが僕を突き飛ばす、またスローモーションになる

マーモットの方向をみると巨大な蜘蛛が真上にいた!!

すかさず銃で狙い打つ、弾もゆっくりと銃口から放たれ蜘蛛にあたる
あたった瞬間また胸が苦しくなってスローモーションが止む

「…上からまだくるぞ!! 二人とも構えろ!!」

「マーモット大丈夫? 怪我不い?」

「…え、うんあなたあの体制からどうやって当てたの?」

「わからない!! いいから構えて!!」

雨の変わりに巨大な蜘蛛たちが空から降ってくる、気持ちわるい限りだ

ガレットは拳を空高く振ると蜘蛛達のジャンプの軌道がずれて別の場所に

飛ばされていくそれをすかさずマーモットが銃で撃つ…僕は

マーモットが撃ちもらした蜘蛛を刀で切っていく…さっきよりは苦しくない

その代わりに体が熱くて早く動く。

このチームワークで巨大な蜘蛛たちの大群を撃退

「こんな大きな蜘蛛見たこと無いわね…ガレットよりも大きい」

「俺よりも…肉弾戦闘じゃきつとやられてたな」

「う…つくぐ!!」

胸が激的に苦しくなる、ガレットが心配して僕に駆け寄る
あれ？スローモーションじゃない…う、意識が…

「おいベレス！！どうしたんだ！！」

「ベレスー！！しっかりしてえ！！」

目が覚めると見知らぬ部屋の一室に寝ていた…なんだ、あの後どう
なったんだ？

生物的危険（後書き）

長い文章だ見ててちょっとつらいです

生物的危险 その2（前書き）

登場人物

ベレス…世界を旅する少年、よく女の子に間違われる

マーモット…黒いコートを着た綺麗な姿の少女

ガレット…【ギルド】のボス、とっても怖い顔をしてる筋肉ムキムキ

【ギルド】…無秩序を楽しむ集団

【機関】…詳細不明、楽園を追い求める

生物的危险 その2

ベレスが意識を失ってまた雨が強く降るようになる、蜘蛛の大群は退けたが、巨大化したしたのは蜘蛛以外の昆虫も同じだった

巨大な蛾や蠅かまきり、さらには土中をうごめく蚯蚓みみず

マーモットが銃の弾を装填、その間ガレットが拳を振るい暴風を起すことによって

休むことなく四方八方から迫る敵を撃退していった。

「はあはあそろそろ体力も限界だな…マーモット弾はまだあるか？」

「あるわよ…ベレス振り落とさないでよね、いくわよ!!」

マーモットはコートの中からサブマシンガンP90を二丁取り出し右手に一つ

左手にもう一つ、火力はかなり増すが安定力に欠ける

ガレットは意識が無いベレスを背負って暴風を起こし続ける、移動しながらの

大群との戦闘いままで経験した事の無い恐怖、これが悪夢であってほしいと願うが

世の中そんなに甘くは無い、現実という名の敵の大群が二人の目の前に

巨大な昆虫となって無数に現れる。

ようやくの思いで敵の勢いが無くなる、一瞬の隙を突いて隣家へと逃げ込む

巨大な昆虫たちはまだ諦めていないようだ、それもそのはず昆虫というのは

巨大であればあるほど動くためのエネルギーを常に補充しなければならない。

自分たちを探す昆虫たちを隣家の窓から覗うマーモット

しばらくして、隣家の奥に行き敵がいらないか安全を確認する

「オールクリア」というとガレットがベレスを隣家のベットへと寝かせる

そして数時間が経つ、ようやくベレスに意識が戻り二人はほっと一息。

目が覚めると見知らぬ部屋の一室に寝ていた…なんだ、あの後どうなったんだ？

マーモット、ガレット…二人とも無事か。

「おはよう…どう気分は？」

「いまは良好かな…」

僕の寝ていたベットの近くに窓があった、窓から外をみるとまだ雨が降っている

意識を失ってから時間はそう経っていないようだ、巨大な蜘蛛たちの大群は

退けられたようだが、二人の顔色がひどく悪いまだなにかあるのだ

ろうか。

「ねえ意識が無い間に何かあったの？」

「蜘蛛だけじゃないんだよ、巨大なのは」

「どういうこと？」

ガレットから話を聞くと耳を思わず疑いたくなったその話が本当だとすると

ここから一刻も早く出たほうが良いんじゃないだろうか。
そう思いながらマーモットに次はどうするか聞いた。

「無論ここから脱出するわ、だけど出ればまた襲われるのが落ちよ」

いったいどうすれば…この状況を逆転できるなにかはないのか…
待てよそもそもなんで昆虫が巨大化した？戦争の影響か？

なんだこの違和感…体の中でのなにかが這いずり回ってるような違和感がある

…工業地帯でなぜ襲われなかった？他の昆虫はともかく蜘蛛は工場の屋根の上にいた
だったらそこで襲われるはずだ…まさか。

「みつけた、ここから出る糸口！これから工業地帯に向かう」

「正気なの！！ここまでするのに何度も死にそうになったのよ！！」

「そうだぞ！どうしてもいくつて言うなら理由を教えてくれ！」

「理由は、昆虫どもの弱点がああ工業地帯にはあるからだよ」

もし僕の読みが正しければ奴らは工業地帯にあった踏みつけた鉄板の中にある！

マーモットは銃を手にとって、いつでもいけるといふ感じであなづく。

ガレットも自分の顔を両手で叩くと張り切っている…よし行こう。

「準備はいいね！玄関開けるよ」

「おう」

「いいわよ」

玄関をそつと開ける昆虫たちに気づかれないように音を立てずに行動する

だがしばらくして地響きがする…いやな予感しかしない。

「走れ！！」

地面のコンクリートを突き破って胴体が大通りの端から端まである位大きな蚯蚓が出てきた

やれやれこれも戦争の影響って奴なのかな？まさに生物バイオハザード的危険だ。

「いままで見てきた奴で一番でかいぞ！！」

「わかってるわよそんなこと！！」

「話すより走って！！」

やたらと早い…ん？おいおいまでよそりやあない…いま後方にいる

蚯蚓は

口一杯に地面の大きな岩を咥えて投げつけようとしている。

「マーモット！！岩撃って破壊できる？」

「やってみる！」

「ガレットは岩が砕かれたら拳で吹き飛ばして！！」

「わかった！！」

岩が蚯蚓の口から放たれる、マーモットの銃が火を噴き始める
弾が岩にぶつかり火花が散っている…まだ砕けない。

まっすぐ僕たちに向かって飛んでくる岩、雨の影響で寸前のところ
で届かない

結局地面に落ちたところでようやく砕ける、だが最悪なことに砕け
散った岩が

道を塞いでしまった。

「…あー！これじゃ進めないじゃない！！」

「俺こんなところで食われたくないぜ！！」

こうなったら一か八かだ…

「二人とも必ず戻るから…先に行っててくれ」

「ベレスあなたどうするつもり！！？…まさか」

「生憎、そのまさかだよ」

僕は蚯蚓の口に向かって走っていく、息がとても臭い……まあしばらくの間我慢だ

僕は蚯蚓に自ら丸呑みにされた。

二人は呆然とする……仲間が目の前で食われるそれでも飽き足らないのか

蚯蚓は二人に向かって前進しはじめる

「くっそおおお！！ベレス……砕けろおおお！！」

ガレットの拳で岩が碎かれる、道が開けて工業地帯まで残り700メートル

全力疾走するが前方に他の巨大な昆虫たち……

今回は逃げるのではなく、道を切り開くようにして戦わなくてはならない。

「ああああああ！！邪魔だああああ！！」

叫ぶと共に銃を前方に乱射、昆虫たちに当たる

昆虫たちの体液が飛び出て二人に返り血のように浴びせられる

それでもいまはベレスの、残した言葉の通り工業地帯に不屈の闘志で向かい走り続ける。

「ついたああああ!!」

「やったああああ!!」

鉄板に身を転がすようにして二人は倒れる巨大な昆虫たちはもう追ってはきていなかった
ただ一匹を除いて。

そう蚯蚓だ…ベレスを飲み込んだ蚯蚓。

「こいよ、化け物相手になってやる」

「ベレス…」

意を決して、身構える二人もはや万策尽きる
弾丸を撃ち込んでもまるでビクともしない。

突然蚯蚓の動きが鈍くなり苦しみだすように、その場で転げまわる
しばらくして、動かなくなる。

「!?!?…どうしたのかしら…」

「まさかベレス？」

蚯蚓の胴体の部分が膨れ上がって中からベレスが飛び出し地面に着地
体液まみれだがピンピンしていて、二人の姿を見るとにっこりと微
笑んだ。

「あー臭かった…心臓ぶっ刺してきてやったよ」

二人はベレスに駆け寄ると自分たちより背の低いベレスの頭を撫で
た。

「よくやったな！、お前が飲み込まれたときは生きた心地がしなか
ったぞ」

「無事でよかったわあ…」

「よせ！頭を撫でるな！！子供じゃないんだよ僕も！！」

さてここからが本題だ、虫たちはこの工業地帯に近寄らない
それには訳がある、いま地面一杯に敷き詰められているこの鉄板
実はただの足場の鉄板ではなくこれは、住宅建築の時に防虫性能が
ある

コルク櫨の木が中に内臓されて入っているのだ。

コルク櫨の木にはスペリンという虫たちが嫌がる物質が含まれている

蜘蛛たちが降りて襲ってこなかったのもスペリンのおかげというわけだ。

「ガレット鉄板何枚か担いで」

「了解ベレスちゃん」

「ちゃん付けにするな、次いったらケツに刀ぶち込むぞ」

「さーせん!!」

ガレットが鉄板を担いだのを確認して、工業地帯を出る
スペリンのおかげで昆虫たちに襲われることなく住宅街を脱出
僕たちは今日もまた生き残った。

だが虫たちが巨大化した理由、この荒廃し腐敗しきった世界で
なぜあのような大きさになったかはいまだ分らない、この700年で
進化を遂げたというにはあまりにも進化しすぎである。

昆虫たちはいまあの住宅街で新たな獲物を待っている。

生物的危险 その2 (後書き)

昆虫編はおわりです、次回からはもっとちゃんとした人間とかを出そうかと思っています。

どのくらい歩いたのだろうか？（前書き）

登場人物

ベレス…世界を旅する少年、よく女の子に間違われる

マーモット…黒いコートを着た綺麗な姿の少女

ガレット…【ギルド】のボス、とっても怖い顔をしてる筋肉ムキムキ

【ギルド】…無秩序を楽しむ集団

【機関】…詳細不明、楽園を追い求める

どのくらい歩いたのだろうか？

愛しさも淡い夢めこの空にとけてしまえばいいのに
そんなことを誰かが言った…。

「ベレスあなたはいずれこの世界に愛さえる存在になるわ
その才能を無駄にしないでね。」

「お母さん？」

母は僕の目の前でなんとも言えない光の粒子になって消えた。

……夢か…こんな夢見たくない、亡くなった人間のが生きてると錯覚して

目が覚めると錯覚が魔法のようにとけてなくなって、不意にその瞬間悲しみが溢れてくる、いまでも両親が死んだ事を悔いているのか僕は。

茶色い若干湿った地面から起き上がって土ぼこりを立てる、服に土が付いたままでは、僕も嫌だ 二人はまだ眠っているようだ。

よほど住宅街で気張って戦っていたのだろう、もう家から離れてどのくらいか

もしまたあの場所に戻るとしたら、その時どんな理由で戻るだろう。

風が朝日と共にさらっと一吹きする、置いてあった刀を背負って朝食の携帯食料を食べる、この携帯食料は戦時中に作られた特殊な

物で

一口で3日は何も食べたり飲んだりせず動き回れる。
おそらく野戦が長引くことを想定して作られたものなのだろう
保存性にも長けていて賞味期限とかいう厄介なものも無い、食べ終
わる。

「すまないがマーモットを起こしてくれないか？」

後ろから声がする：誰だろう？それにまったく気配がなかった。
後ろを振り返ると黒髪でマーモットと同じコートを着た男性が立っ
ていた
仲間だろうか？とりあえずマーモットを起こしてあげよう。

「マーモット、お仲間が来たよ」

「…ああん…？お客さん？」

「寝ぼけてないでしっかりしてよお仲間だよお仲間」

「へいへい」

だるそうに起き上がってすくつと立つ、やたらと目が細くてまだ眠
いようだ
仲間の方を向くと目をこすってたり見開いたりして、一生懸命自分
を起こそうとする
そして何の用だとマーモットは尋ねた。

「ホーネットか…何の用？」

ホーネットと呼ばれた男性はコートのポケットから、手紙を渡す
マーモットはその手紙を、声に出して読み始めた。

「【機関】からか：なにかしら？えーと

” 帰還命令です、人工衛星の復旧作業が最終段階に入りました力
仕事ができる人間と

エンジニアを連れてきてください” 狙いったような手紙ね…もう
ここに揃ってるわ」

「そうか俺は先に【機関】に戻って君の現状を報告させてもらうよ」

そう好きにして頂戴とマーモットはホーネットに言う

ホーネットはさっさと行ってしまった：ほんの少しだけいただけなの
に

空気がピリピリしていたような感覚がする、もしかして仲悪い？

遅れて大きなあくびをしてようやくガレットが起きる。

「あーまだ眠い…あ！首がカチカチだー寝違えたかな？」

「直してあげようか？」

「おお！ベレス頼む」

僕は傾いてるがレットの首を勢いよく逆の方向に持っていた
グキリという音を立てて、ガレットの首が直る

直ったはずだったがまたガレットは眠ってしまった：

「おい、何で二度寝してるんだ！起きろ！」

「いや、これは気絶してるんじゃない！？強くやりすぎたでしょ思
いっきりグキリ

っていったよ！！」

「あーやりすぎちゃった」

絶対わざとだ、そんな顔をするマーモットをみて今日も普通の一日
が遅れそうな気がして
なぜかほっとする、間もないうちにガレットが起き上がる…早！

「相変わらずの辛口ー」

三人全員が起きたところで出発、目的地は【機関】ちょっとした好
奇心が沸いてくる
人工衛星とかいってたな…いじらせてもらえるだろうか。

しばらく歩くとゴツゴツした岩山に着く、足場が非常に悪く踏み外
せば怪我をする

足場のしっかりした岩を選んで進まないで、落っこちてしまいそう
だ。

しかし高いなあ最後尾のガレットが泣きそうな顔をしてこっちを見
ている

「下を見ない下を見ない…」

どうやらこっちを向いてるのは高いところが怖いからみたいだ…こ
んなんで

どうして【ギルド】のボスなんてやってたんだろう。

先行してるマーマットの姿が小さくなる慣れているのだろうかどん
どん進んでいく

ようやくの思い出岩山のから抜け出す。

「ベレスここで一旦休憩よ、次は楽しいロッククライミングだよ」

マーモットは上を指差す、この岩山どうなっているのだろう…途中で

登山のような道のりだったがここにきて山道がなくなる。

代わりに切り立った絶壁が目の前にある、これを上るのか？

結構きついだろうな……天辺の方は雲がかかっていた。

遅れてガレットが来る、ガレットに絶壁のことを教えてあげた。

$$\vdots$$

無言の三点リーダー、そして額から汗が以上に吹き出る……

「高いところ怖いのか？」

マーモットが聞いても、無言のまままだ

「昇○拳で上れたらな…」

よし、いまその昇○拳をしてやろうじゃないか：降りる時はしらないけどね。

「昇○
…」

「まったくええええええ!! いい方法があった!!」

拳に力を入れて技名を叫ぶ前にガレットはなにか閃いた様だ
どうせろくな考えじゃないんだろうな…僕は腹のそこから呆れる覚
悟をする

マーモットも僕と同じ顔をしていた。

「戦前、かの有名なロシアのプロレスラー、ザンギ○フはダブルラ
リアットで

空を飛んでいったという伝説がある…それを歌にした曲まである
というではないか」

「なあに！ガレットにしてはまともなこというじゃん！」

うおい…ちょっとおかしいだろう！そんな迷信がどうしてまともな
んだよ！

おかしいでしょうに！マーモット目を覚ませよ！！

「いってきます 半径85cmはこの手の届く距離♪」

「シャラップ！！」

空気を呼んでこれ以上歌わせないように突っ込みを入れたがまだ歌
っている…

回転速度が増していく…ま、まさか本当に…

「飛んだわ…」

「ええええええ…」

ガレットは本当に飛んでいった、歌声は離れていくと共に小さくな

りつつある

本当にどういうキャラなんだあいつは…そうかあれが本当のバカって奴なんだな

僕は悟ったぞ！！天性のバカがあそこにいると。

「さあて私も行くかな」

ん？両手を広げてどうしたんだろマーモット…まさか…。

「半径85cmはこの手の届く距離♪」

もう突っ込まない…疲れてきたよ僕…なんでもありだな二人とももう好きにしたら良いじゃない…僕だってやりますから。

「えーいちくしょーう！！良いだろうやってやるよ！！真・昇○拳！！」

二人とは違う技で絶壁を上り始める僕は結局最下位で、頂上に到着二人は笑顔で僕を迎えた。

「ここが【機関】の門よ」

硬い鉄の扉が目の前に現れる、そして開く

中には降下式のエレベーターがある…どうやら外からの侵入者を完全に避けて作られてている

降下式のエレベーターが止まって【機関】の内部がようやくお目にかかる。

全て金属張りの天井、壁、地面、とっても広い

中にいる人々は皆同じコートを着ている、外でこんな集団を見たこ

とは無い

何もかもが新しい世界だ、そうぞうとはまったく違う

人が十分不自由なく、暮らしていける環境がなかにはあった。

マーモットは施設を案内してくれるそうなので、そのまま付いていく事にした。

どのくらい歩いたのだろうか？（後書き）

今回はギャグ回って感じですね…

それじゃまた次回はシリアスにいきましょうそれでは。

オーガナイゼーション（前書き）

登場人物

ベレス…世界を旅する少年、よく女の子に間違われる

マーモット…黒いコートを着た綺麗な姿の少女

ガレット…【ギルド】のボス、とっても怖い顔をしてる筋肉ムキムキ

ホーネット…【機関】の人事を取り仕切ってる、マーモットと同じ
くらいの歳

【ギルド】…無秩序を楽しむ集団

【機関】…地下に大都市東京を再現している、楽園を追い求めてその力で外の世界へ出てもう一度暮らそうと願っている多くの人々の
集団。

オーガナイゼーション

【機関】は地殻変動できあがったとても大きな岩山の中にあった、想像もしなかったこんな広い施設を所持して拠点にしてるなんて、これだけ大きければ人も沢山いるだろう。

昇降機を降りてエントランスホールと呼ばれる大きな広場に出る、天井、壁、地面が全て一つの純白のタイルで造られていた磨かれたように綺麗だ、大きなアーム型のカメラがマーモットに近寄る警備システムの一種だろうか？「人物照合中」というアナウンスが流れる女性の声だ、しばらくすると照合が終わって「お帰りなさい」と機械が言う、次にカメラが僕に近寄った…このままだと嫌な予感がある。

「彼らはお客さんよ、イブ」

マーモットがカメラに向かって言う「了解」という女性の声がまた聞こえる、嫌な予感は外れたあのままマーモットがなにも言わなかったら、きつと警報とかが鳴って攻撃されてたんじゃないだろうか？そういう予感がしていた。

「ねえマーモット、イブって誰？」

「この施設を管理している最先端技術の人工知能よ、人見知りが激しくてね見慣れない人間をすぐ殺そうとするの」

なにそれ、いったいどういう人工知能だよ…機械が人見知りとかありえないでしょう、作った人末期だな、あとで人工知能の管理されている場所にでも行って、データを書き換えてやろうか。広くて大きな純白のエントランスホールを抜けると、今度は間逆の黒い部屋

に出た、いや違う部屋じゃない：これは町だ戦前の町、東京が地下に再現されている、しかもご丁寧に夜だ天井が黒いのは夜を再現するためなのだろうか？町の電飾が綺麗に輝いてる。

「たまげた、これ全部が【機関】のなしえた業なのか？」

ガレットが驚いた口調で言う、僕にしてみれば現実から目を背けた人間たちがここで楽をしているようにしか見えない、けどもし”樂園”を探している事が本当ならば多少は外の世界を認識しているだろうと認めてあげても良い。

「今日はみんな疲れたでしょう、私の家に案内するわそこで今日は眠れるわよ」

マーモットの家は地下東京の中心部にあるらしくそこまで歩いて約一時間：遠い、道行く人たちを見たけど全員が黒いコート、つまりは【機関】の制服を着ているわけではないようだ、それに幸せそうに見える通り過ぎ際にみた両親に手をつながれて歩いてる子供がうらやましくて妬ましくなってくる：ああなんて酷なんだろう僕は。

「到着よ、あら？ホーネット来てたの」

「やあマーモット明日の仕事は休んでいいそうだ、その代わりその二人に用がある例の人工衛星の修復の最終段階を手伝ってもらおう」

キタコレ！！人工衛星をいじらせてもらえる！！明日が楽しみだな。

「えーとこっちの小さい女の子：いや男の子か、この子がエンジンア？」

「そうよ、やたらとガラクタイじりが得意らしいわ、背負ってる刀だって自分で作ったものよ」

この人僕が男だってわかるのか、親以外に性別を当てられたのは初めてだなあ、でもなんかこの人嫌な感じがするなんだろう…ゆっくりこっちに手を伸ばして頭を撫でようとしてる…!!

「おっと危ない子だなあ…」

「こう見えて実は16歳なんだけどなあ」

気がつけば僕は刀を鞘から抜き取ってホーネットを切りつけようとしていた、ホーネットは人差し指と中指に刀を挟むようにしただけで止めた…できれば敵に廻したくない相手だ、一瞬でそう思わせられるホーネットはにっこり笑っているのに…なんだろうこの恐怖は。

「俺はガレットだよろしくな」

「うん、よろしくガレットさん明日は期待してるよ」

ガレットは僕と違って彼の殺気というか…恐怖?には気づかない、まあバカなガレットのことだ気づかなくても仕方ないか。僕は改めてマーモットの家を見るレンガで造られていて西洋風な家だ、意外と大きい、これを一人でいままで独占していたのかな?羨ましいと思う反面家族もいなくてさびしくなかっただろうかという心配の気持ちもあった。

「自己紹介が遅れたね、僕はホーネットここの人事を主に任されているんだ、その他にも色々な仕事をしたりしているけど…そういえばまだ他に仕事が残っていたな。」

そういうと彼は僕に近寄って耳元で囁くように聞いた「名前は何？」

「ベレス……」

「そうか次会うときが楽しみだよ、今後に期待してるよ」

気持ち悪い……あんな奴本当にこの世にいるんだな。マーモットが家の鍵を開けて玄関に入るそれに続くように僕たちは家に入った、なんだろうこの懐かしい臭い……家……僕が住んでいた外の世界の家そっくりの臭い……ここにいますかと思ひ出す懐かしいあの日々。

この家は二階建てで二階にマーモットの部屋がある、一階には全部空き部屋でマーモットは好きに使って良いと言った。なんだか彼女がひどく寂しい人間に見える、ガレットは空き部屋のことなど気にせず

自分の気に入った部屋で爆睡してしまった。僕はマーモットのが気になるって二回にある彼女のいる彼女の部屋まで行く事にした、ドアをノックすると中から「どうぞ」と言う声が聞こえる、中に入ってみると目に飛び込んできたのは他の部屋とは違う風景、普通の人間らしく普段着ているような服がハンガーにかかっていたりして少し安心した。

「ホーネットが嫌い？」

唐突な一言だった、僕はすぐに素直に首を縦に振って返事をした。

「なんか……気持ち悪いあの人……」

「あいつは人の不幸を本当に喜ぶような人間だから気をつけて……以前私も彼に嫌なことされたから」

「どんな事？」

彼女はすぐには返事をしなかった、暗い窓のほうを向いてから返事をした。

「ずっと私生活を監視されたの：誰に頼まれたわけでもなく、ただ暇つぶしといってね私は嫌になって部屋にあったものとかほとんど捨てたわけど一つだけ捨てなかったものがあるわ」

「なに？」

「両親の写真よ、まだ赤ん坊の私を父が抱いてて母はその横で笑ってる」

部屋の棚から写真を取り出すと僕に見せてくれた、外の世界の家とマーモットの両親が笑って写っている、僕の両親は記憶にあるうちに死んだけど彼女はその記憶すらない：きっと悲しいだろうな。

僕が彼女と同じ立場だったら到底耐えられない、死んでしまいたいそう
だ。

地下の町は休むことなく電飾をキラキラ輝かせていた。

オーガナイゼーション（後書き）

シリアスすぎる…やっぱこういうの耐えられない W W W W

おkギャグ5シリアス5のバランスの取れたお話を次回はお約束します W W

アウトサイダーの家族（前書き）

ベレス…世界を旅する少年、よく女の子に間違われる【アウトサイダー】

マーモット…黒いコートを着た綺麗な姿の【機関】の少女

ガレット…【ギルド】のボス、とっても怖い顔をしてる筋肉ムキムキ

ホーネット…【機関】の人事を取り仕切ってる、マーモットと同じくらいの歳、陰湿な性格で人の不幸を喜ぶ

【ギルド】…無秩序を楽しむ集団

【機関】…地下に大都市東京を再現している、楽園を追い求めてその力で外の世界へ出てもう一度暮らそうと願っている多くの人々の集団。

【アウトサイダー】…【機関】が外で暮らす人々を呼ぶ時の一般的な総称

アウトサイダーの家族

マーモットの部屋でお話：彼女のいろんなことがわかった、こういう時は何か励まして上げられるような事を言うのが一番良いけど、ろくな言葉が思いつかない。

だけどいまはその、ろくでもない言葉を彼女に言ってあげよう。

「僕が家族になる、マーモットの家族になる！」

すこしだけ大きな声で言う、一瞬時が止まるような感覚と共に顔が自然に笑顔になる、彼女は無表情で僕を見るが、しばらくするとクスクスと笑いながら涙を目に浮かべて返事をした。

「うん、ふつつかものだけどよろしくね。シャワー浴びるか？」

話が一段落したら彼女はコートを部屋のハンガーにかけて沢山の銃を持って、一階に降りてシャワールームに向かった僕はシャワールームを見たことが無い、外の世界にはそんな物なくて代わりに戦時中使われてた兵士を負傷した体から回復させたり、汚れを落としたりする変なカプセルがあった：：：そういえば最近入ってなかったなあ。シャワールームも同じような物なのだろうか？一階に下りてマーモットを引き止めて話しかける。

「僕もシャワーっていうの試してみたい！一緒に入ろう！！」

「：あのねベレス！そういうこと気安く言っちゃダメだよ！物事にはデリカシーって物とか、大人の事情とか色々あるんだけど：：その、うまくいえないけどシャワーっていうのは裸で入るから裸を他の人に見られたら恥ずかしいでしょ？だから一緒には入れないの、交代

で入りましょう。」

よくわからないけど、断られてしまった…シャワーって裸でする事なのか？確か、お母さんが女の子の体をじろじろ見たり、むやみに触っちゃダメだって言ってたのを思い出した。そうか！これが大人の事情って奴なんだな！！よく理解したぞ、だが「ダメだといわれて引っ込むな」というお父さんの言葉も忘れちゃいけない…むうこの場合どっちが正しいんだ？まあとりあえずなんだか悪い気もするけど、試して見るか。

マーモットが入っていったシャワールーム前の脱衣所に入る、中ではマーモットが服を脱いでる途中だった…僕を視界に捕らえると服を脱ぎかけのまま銃を握り締めて、僕に銃口を向けた。うんこれはまずいな…選択肢を誤ってしまったようだよ要するにこれが死亡フラグって奴なんだろう、けどですっごいわかりやすい死亡フラグは回避可能だ、銃弾をよければ済む話だ。

「…今回だけよ」

あれ？撃ってこない…今回だけ？なるほど一緒に入ってくれるってことか、なんか緊張するなあ…マーモットと同じように服を脱ぐ、マーモットは衣服を全部脱ぐとタオルを一枚体に巻いてシャワールームに入る、僕もそれと同じようにして入る。

「…男の子は腰からただけでいいのに」

「なんか言った？」

「いや、なにも」

他の人間とお風呂に入るのは初めてだ、私はこの子とは違って常識人なので羞恥心というものがあるがこの子からは無邪気以外の何も感じられない、だから邪見にはしにくい故に困る：シャワールームに入って蛇口をひねると、丁度良いお湯が体にかかる。ベレスにもお湯をかけてあげる、後はシャンプーや石鹸を使って頭から足の先まで体を洗って浴槽に入れば良いのはわかっているが、ベレスは初めてだからそれが分らない：仕方ないので私が洗ってあげる事にした。

「なんだか恥ずかしいなあ…」

「ベレスと一緒に入るっていったんでしょう、我慢しなさい」

しかしこうしてタオルを巻いてると、本当に女の子みたいだそれに女の私が嫉妬するほど白い肌：嫉妬を通り過ぎてここまでくるとむしろ愛おしくなってくる、彼の体を一通り洗い終えて一緒に浴槽に入る私は彼の保護者ではないというのに：だが家族だ。

「カプセルよりも気持ちいいなあ…」

ベレスの口から感想が出る、【アウトサイダー】の彼はこっちの地下都市の生活に慣れるのに時間がかかるだろう、【機関】のこともある…。

明日からは忙しくなりそうだが、今気がついたことだがベレスとの身長差は十cmくらいあるどうでもいいように思えてしまうが時として身長差はこういった状況を逆転する最大の武器になる、やってみるか。浴槽でベレスの後ろから抱きつく。

「ふにゃあああ!?! マ、マーモットそんなにくっついてたら恥ずかしいってば!!」

「そう…私は恥ずかしくないわこうすれば裸見られずに済むし、それに…かわいいベレスを好きに出来ちゃうから」

「…うー」

顔を赤くして浴槽の中にもぐるベレス、やっぱりかわいいもったいないなあこの地下都市でもし女の子だったらきつとモテまくりなのに。

シャワールームから出る：乾いたタオルを取り出して体を良く拭く
：シャワーがこんなに恥ずかしいものだとは思わなかった、正直い
ま後悔してます、はい本当にすいませんでした。調子に乗って悪か
ったもう二度とやりません…。

だが願わくばあのやわらかい胸の感触だけはあってもかまわない！
！全世界の男性がきつとそう思うはずである。

急に目が覚めてしまったぞ…まだ夜か、いや地下なんだからいつも夜というべきか？頭が混乱してくるなあ、まあまだ時間はあるが…ここは一つ町をめぐってみるか、二人はどこだろう？二階には確かマーモットがいてベレスはどこだ？

しばらく家を探索していると二階でベレスとマーモットが一緒に寝ていた…起こさないでおこう。玄関のドアを開けてこっそり家を抜け出す、久しぶりの一人ぼっちだ…一人ぼっちの夜…なんてな…。

「確かこの地下都市は東京をモチーフに【機関】が作り上げたものだっけ？」

「ということだ」秋葉原”なるものがあってもいいはずなのだ！”
「そうだ！秋葉原にいけ！」俺の中の何かがそう告げる…しかし道がわからない、こういう時はオタクっぽい服装の人間に親しみを込めて聞けば教えてくれるはずだ、そう思っていると丁度良くボー○ロイドのコスプレをした女性が目の前を通りかかる。

「失礼、秋葉原はどこでしょうか？」

「えーと、ここも秋葉原ですよ？もしかして【アウトサイダー】の方ですか？」

「アウトサイダー？聞きなれない言葉だなあ」

「外の者って意味です…初めてなら案内しますよ？」

「いや結構だ、大通りの場所はもう分った」

女性はそうですかというと、歩き去っていった。

俺は大通りを目指して歩き進む。

アウトサイダーの家族（後書き）

今回はなんだろう、申し訳ない W W W
言いたい事はそれだけです W W W

サテライト（前書き）

ベレス…世界を旅する少年、よく女の子に間違われる【アウトサイダー】

マーモット…黒いコートを着た綺麗な姿の【機関】の少女

ガレット…【ギルド】のボス、とっても怖い顔をしてる筋肉ムキムキ

Dr. ヘレン…【機関】の一番えらい研究員、いろんなことをしてる。戦闘もできる、女性。

ホーネット…【機関】の人事を取り仕切ってる、マーモットと同じくらいの歳、陰湿な性格で人の不幸を喜ぶ。

【ギルド】…無秩序を楽しむ集団

【機関】…地下に大都市東京を再現している、楽園を追い求めてその力で外の世界へ出てもう一度暮らそうと願っている多くの人々の集団。

【アウトサイダー】…【機関】が外で暮らす人々を呼ぶ時の一般的な総称

サテライト

俺は大通りを目指して歩き進む。時刻は深夜の11時を回っていたが地下都市の秋葉原はとてにぎわっていた、明日は仕事があるので今日は様子を見て帰るつもりだ。…うむオタク文化は今でも健在のようだな、戦争でもはやそんな文化絶望的だったかと思っていたが、以外としぶといな嬉しい限りだ。しかし俺はいつからこんな文化が好きになったんだ？ベレスと出会ってからか…。

そう俺は元々【ギルド】のボスだった、だが運命の出会いが人を変えてしまった…罪な子だなベレス、オタクの町秋葉原の電気街はやはり独特の雰囲気だコスプレイヤーがいたるところにいて、そして愛すべき二次元キャラクターたちの大きな広告、戦前の姿のままを完全に真似られている。

「やめてください！！はなして！！」

なんだ、女性の叫び声か？【機関】は治安の管理はどうなっているんだまったく、仕方ない、いくか駆けつけてまず視界に入ったのは女性と黒いコートの男だった…さてよその黒いコートは【機関】の制服…

「あ、ガレットさん」

「ホーネット！」

女性はホーネットが俺に気をとられている内に逃げ出した、なぜこんなことをするか事情を聞こうと思ったが先にホーネットが口を開く。

「なぜこんなことを、って思ってる顔ですね」

「なんの罪も無い人間になにをしていた？」

「あなたに言われたくないですね、元ギルドのボスに」

こいつは俺がギルドのボスだったということを知っている！何者なんだ？懐から銃を取り出すとその銃口をこちらに向けた。

「なんのつもりだ…」

銃を一発俺に向けて撃つが外れる、いやわざと外したのか？いったい何を考えてるんだこいつは…

「俺も昔は外で暮らしてましたよ…けど両親が死んでこの世界が憎くてねこうやって時々ストレス発散しないと耐えられないんですよ。」

「そんな話を俺にしてどうする同情しろとでも言うのか？」

ホーネットは銃を下ろして安全装置をかけて懐にしまうと笑いながら「同情なんてされたら惨めじゃないか」と言った。

「僕が言いたいのはこの世界が許せないこと、それだけです」

そう俺に言い残すと風のように一瞬にして消えてしまった、その後彼の姿を一応探して見たがどこからも出てくるわけも無く、結局見つけれなかった。ああ言った奴は今まで見たことが無い出会って間もない頃ベレスが刀で一閃しようとしたのは、奴の本質を見抜いていたからなのだろうか？

考えても仕方ない、いまはもう帰って休むとしよう。家の玄関を開けてそっと自分のいた場所へ戻る。

朝になる：僕は目をこすって起きる、一緒に寝ていたマーモットがいない。どこへ行ってしまったんだろう？家の一階からいい臭いがする、もしかしてご飯でも作ってるのかな、一階に下りてキッチンを覗くとなんとエプロンドレスを着てるガレットがいた…。世も末だ。

「なにしてんの？気持ち悪いかっこして」

「朝飯の用意」

こいつが作ったご飯を食べたら口から妊娠しそうだ：間違っても僕は食べたくない、居間の方へ行くともうすでに、犠牲者が出ていた、ガレットの飯を「うまいうまい」と言いながら口に運ぶマーモットの姿がそこにはあった…。

「おはよう、ベレス」

「おはよう、マーモット体に異変はない？あいつが作ったご飯なんだから無闇に食べたら体壊すかもよ」

「ひどいよベレスちゃん」

後ろを振り向くと料理を持ったガレットが泣きながら立っていた、構うものか……ちゃん”付けしたな刀どこだ？こいつのケツにぶち込んでやらなければ気が済まない……。

「ベレスおいしいから本当に食べて見たらいいじゃない、文句や罵倒は食べてから言うものだよ」

「……わかったよ」

しぶしぶガレットが作った料理を口に運ぶ……嘘だろこんな旨いもの初めて食べた、僕の舌が生まれて初めてうなったのだ、仕方ないちゃんと全部食べてやるか、そのあとで刀をぶち込むでしょう。全てを残さず完食して二階に上がって刀を佩く。

「ガレットー」

「なんだベレス？……タイムタイムいきなりどうした！！……アッー！！」

ケツに刀をぶち込んで引き抜くご飯は旨かったが、僕を”ちゃん”付けで呼ぶことは許さない、誰にも言わせない……言ったら最後この筋肉もりもりムキムキマッチョマンの変態のようになるのだ。そんなことはさておき、今日は人工衛星とやらの修復作業を任せられているんだマーモットに作業場所を聞いておかなければ。

「人工衛星の修復？ああ確かそんな仕事があったわねー、確かここから丁度西あたりの工場で作ってるわよガレットも連れて行ってあげてね、彼の力が必要だから」

なんであんな変体が必要なんだ：戦闘以外で役に立った事あまり無いじゃん。

「ひどいな：虫除けの鉄板運んだり、朝飯作ったりしたじゃない」

「人の心をよむなあああ！！」

叫びながら飛び蹴りを腹打ち込んでやる、命中して痛がる。さてこのおバカを連れて行くところに行くか、玄関を出る。さすが地下、朝になっても暗いままだ：それでも人々はこので、なに不自由なく生活している、マーモットは今日は仕事が無いので家で休んでいる。確かここから西だったな、どのくらいの距離かは聞きそびれてしまったがしばらく歩くとすぐに分った「サテライト研究施設」という標識が建物の前にあった、サテライトというのは英語で衛星という意味だ。

「お前らが今日来る、使用人だな：付いて来い」

建物の自動ドアをくぐると、サングラスをして白衣を着た研究員らしき女性が迎えてくれた、ちょっと無愛想な感じがする：付いていくと人工衛星の修復が行われている作業場に連れて行かれた、作業場の中は明るくてよく周りが見渡せる、人工衛星は組み立てられた鉄骨で覆われていてとても大きい。見ているだけでワクワクしてくる機械いじりは得意だ。

「自己紹介が遅れたな私はここの研究員のD r. ヘレンだ、いまは人工衛星の復旧作業担当隊長を任されている」

「ベレスです、お会いできて光栄ですD r. ヘレン」

「ガレットだ、力仕事なら任せろ」

「では早速今回やらしてもらおう仕事プラス完成したらどういった目的で使うかを説明しよう、諸君らも知っているよう戦前、楽園という化学実験が行われその成果を日本が独占、戦争の引き金となった近年地球は崩壊がすすみ死の惑星となった、だが楽園さえ手に入ればまたこの惑星は蘇る【機関】はその目的を果たすため人工衛星を使つての搜索に踏み切つた、完成さえしてしまえば国外に持ち去られた楽園の搜索などどうさも無い事だろうと私は思っている、それで肝心のカメラ部分がまだ造れていない…ベレス頼めるか？」

D r. ヘレンはサングラスを僕を見つめる、どういう意味があるのかは知らないがまあ引き受けるためにここに来たようなものだ、無論僕は首を縦に振つた。

「人工衛星用のカメラですね、材料は揃ってますか？」

「ああ」

「なら二時間で作ります」

D r. ヘレンは「そんな短時間で大丈夫か」と聞く僕はこう返した「大丈夫だ、問題ない」後ろでガレットが「それ死亡フラグだ」というが、なんのことか僕にはさっぱりだ。とりあえずガレットに材料をここに持つてくるよう頼んだ。彼はマッチョなので顔色一つ変

えずにここに材料をすぐに持ってきてくれた早速作業に取り掛かるうとしたときだった、作業員らしき二人の声が聞こえる

「なあしってるか？お前あの話」

「なんだよ…どの話だ？」

「しらねえのか？ここ（機関）では人体実験が行われてるだってよ！おっかねえよなあ」

「まじかよ！！最近俺たち作業員も数が減ってるなと思ったら…まさか」

「そのまさかだよ！噂じゃその人体実験、人の脳みそいじっておかしくしちまうらしいんだ、けど成功したした奴らがいたらしくてな、一人はみんなしってるあの”銀色の魔女”だよ詳細は不明だけど」

「ああ、【機関】のお気に入るか、ありえない運動神経してるものな」

「それともう一人こいつは運動神経とかってレベルじゃねえ、他人の脳に干渉する超能力みてえなの持ってやがる奴だ、名前は確か”ホーネット”だったか？」

ホーネット…確か【機関】の人事を取り仕切ってる奴、それとマーモットに変なことした奴だ…

「それにその実験まだ続いてて、戦闘員たちの強化も行われてるらしい」

「へえー、目つけられたら最後だな」

思わぬ情報だ：噂だから嘘かもしれないだが、本当だったらどうなるんだ？そもそも【機関】の最終目的はなんだ？楽園の回収をして地球を治すことじゃないのか？なのにどうして人体の強化なんて、嫌な予感しかない：藪をつつけば蛇がどうか言うけどなんにしても確かめたほうがいいな。

「おいベレス、さっさと作っちゃまおうぜ」

「あ、ああ」

二時間後、見事に人工衛星用のカメラが出来上がったレンズの調整で宇宙から顕微鏡のごとく地球をどこでものぞける。完成した事をガレットにDr.ヘレンへ報告させ、完成の度合いをみてもらった。

「見事だな！私は関心したぞ！ここまで完璧にするとはアウトサイダーなだけあるな。」

「いやあ…それほそでも」

なんでガレットがほめられてんだ！？作ったの僕だよ！！Dr.ヘレンも末期だな、そうそう末期といえはこの人工知能作ったのは誰だろう。

「Dr. ヘレンこの人工知能作った人誰ですか？」

「私だ、君たちになら見せてやってもいいぞ特別に管理室に」

人工知能が末期な理由がわかったぞ、こいつですねなんとなくガレットと同じ感じがすると思ったら、そういうことか：やれやれ僕の周りには変態しかいないのか？まあいいや人工知能の管理室にいくか、Dr. ヘレンに案内されてさらに地下へと向かう、サテライト研究施設の地下にあるのか人工知能…。

「ここだ：町の様子、一人ひとりの行動そして性格までをここで分析し把握している【機関】のデータなんかもここで極秘に管理されている」

「すげー何がなんだかわからねえ！！俺は先にマーモットの家に帰ってるわ」

さすがガレット！そこに痺れないあこがれない！：と心の奥底で叫んでおいた、極秘のデータか：まだ分らない事が多いから見ておくのも悪くないな、すこし荒っぽいがDr. ヘレンには退場願うか。

刀を一振りするがかわされる、「太刀筋が荒いぞお嬢ちゃん」どこかで聞いたことのあるセリフだ、ムカツク：それにまたお嬢ちゃんか、もう聞き飽きたな。

「刃を向けるということはそれなりの理由があるのだろっうな？」

「ありますですが、こちらもそれをしゃべるつもりはない」

「ならば力ずくでも吐いてもらおうぞ！！」

ナイフを白衣のポケットから取り出す、ナイフか刀とじゃ話にならないな…馬鹿め、深呼吸をひとつし再び切りかかる。

「この！……消えた！！？」

「後ろだよお嬢ちゃん…」

いつのまに！！ナイフの刃が背中に突き立てられ強く押される…そんな嘘だろこれじゃ致命傷だ、そう思った時だったまた胸が苦しくなった、まさかと思って動いてみる。自分は自由に動けるのに回りは違う、コンピューターの明かりの点滅がゆっくりだ…Dr. ヘレンもか。

「そこだ！！」

「なに！！しまったナイフが！！」

ナイフが手元からはじかれる。

「いまの一瞬でどうやって…だがこれで終わりだと思うなよ」

胸の苦しさがおさまる、相手はまだ反撃の意思があるのにスローモーションが終わるのは困る、仕方ないこの状態で戦うか、ナイフははじかれて拾いに行くには遠すぎる、動けばすぐにわかる…なに！！

「私は頭の中いじられてるんでね…瞬間移動が可能なんだ実際には早く動いてるだけだが」

「ちっ、こんな時にスローモーションが発動すれば…」

頭の中をいじられてるとかいったな…実験のことは本当みたいだな、
となるとまずいな【機関】を敵に回したら、それこそ自殺とかわら
ないってことか。まあいいかももう遅いような感じだし、D r・ヘレ
ンだってどうせ【機関】の一部だ、なら最後にこいつに言わなきゃ
な。

「D r・ヘレン、僕は男です」

「にゃんだとおおおおお!!」

シニールだな猫語になった…。

「そこまでにしていただけですか？D r・ヘレン」

「…貴様、ホーネット!!」

「ホーネット…!」

「彼にいま死なれては困ります」

このタイミングでこいつまで出てくるとは最悪だ、ここは潔く退く
べきだろう…なんだ!体が動かない!!どうなってるんだ!?

「D r・ヘレンあなたは、このアウトサイダーに極秘エリアまで通
してしまった、よって処罰が下されます。」

「…なに!!ここを作ったのは私だぞ!!そんなことできるはずが!」

ホーネットはにやけながらDr.ヘレンに近寄ると彼女の頭に手を触れただけで失神させてしまった、体はまだ動かない…こいつとはやりあうには、角が違いすぎる…間違いなく殺される。

「ベレス、君は出会った人全てに刀を振ってるのかい?呆れるなあ」

「それは誤解だな、くっそ!うごかない!」

僕の身動きの取れない様をホーネットはただ見つめる、まさかこれもこいつが…確か噂じゃ他人の脳に干渉するとかいう不気味な超能力を持ってるんだっけか?…この化け物。

「察しがいいねどうせだから、そのまま話をしよう」

こいつ人の心まで読みやがった!!

「【機関】の上の人たちが君を組織の一員に引き入れたらしい、能力を高く評価されてるよ」

「…目的が分らない組織なんぞに僕は入りたくないね、なあ教えてくれよ【機関】の最終目的を」

「それはできない、あーしかも断られちゃったしね まあ、君にはまだ利用価値がありそうだから今回のところは生かしておいてあげるよ。それじゃバイバイ」

風のように視界から消え去る…生かしておいてあげるだど?いつで

も殺せるってことか：恐ろしい奴だ次こそ会ったら本当に殺されるかもしれない、やつはモンスターだ人間が適う相手じゃない。

「…う、糞あんな奴に」

D r. ヘレンが失神から目を覚ます。

サテライト（後書き）

今回はえらく長くなってしまったな。

ブレイクブレイン（前書き）

ベレス…世界を旅する少年、よく女の子に間違われる【アウトサイダー】

マーモット…黒いコートを着た綺麗な姿の【機関】の少女

ガレット…【ギルド】のボス、とっても怖い顔をしてる筋肉ムキムキ

Dr. ヘレン…【機関】の一番えらい研究員、いろんなことをしてる。戦闘もできる、女性。

ホーネット…【機関】の人事を取り仕切ってる、マーモットと同じくらいの歳、陰湿な性格で人の不幸を喜ぶ。

【ギルド】…無秩序を楽しむ集団

【機関】…地下に大都市東京を再現している、楽園を追い求めてその力で外の世界へ出てもう一度暮らそうと願っている多くの人々の集団。

【アウトサイダー】…【機関】が外で暮らす人々を呼ぶ時の一般的な総称

ブレイクブレイン

【機関】は恐ろしい実験をしていた、人の脳を改造し本来の能力を数倍に高める実験だ、その実験は最初は犠牲者ばかりだった。だがある時、成功した：それはまだ幼い子供を実験の対象にした時だった、性別は女性で両親は死亡したと思われる、彼女は最初の成功例にして最強の能力を発揮した。

その後【機関】の殺戮兵器、つまりは殺しの道具として幾多の戦闘訓練及び実戦を繰り返させられた、そして彼女の能力だがいあって単純な物だった。「念力」だ、この力は彼女自身好んで使うことはあまりない、使われるとしたら確実に敵を仕留めるときだけ。確実に任務をこなして標的には一切の情けをかけない常に無感情、その見るものを震え上がらせる冷酷さと美しさから”銀色の魔女”と呼ばれるようになった。

こんな事なら：私、生まれてこなきゃ良かった。

「マーモット、上が緊急集合だってさいやー本当残念なことになったね ヒッヒッヒ」

「：：：そんな」

狭い管理室に僕はいた、ヘレンが失神から目を覚ますと管理室をうろろし始める、そして人工知能の手動操作端末にUSBを挿すとフォルダから全てのデータをコピーした。

「瞬間移動の能力が消えた以上用済みってことか、ベレス」

「なんですか…」

「ホーネットに見られた以上もうここにはいられなくなった、脱出に手を貸してやる」

「素直に一人じゃ逃げられないって言って欲しいですね。あなたも死ぬのは嫌なだけでしょ」

ヘレンは「そうだな」といって人工知能の電源装置に手をかけた、アナウンスが流れる「警告…電源を切る事によって一般住民に危害

が及ぶ可能性があります」そんなことお構いナシに電源を切る、シューンという電力の落ちる音がする、電力がなくなったのはカメラやセキュリティーなどの装置だけのようだ。ヘレンは「付いて来い」と一言、僕はそれに従う。

「すぐにでも私たちを始末しに【機関】の強化兵士たちがくる、武器を取ってくるからお前は先に早く外の世界に出る昇降機の元へ走れ」

「そういうわけにも行かない、仲間は置いていけません」

ヘレンはため息をひとつ、そして僕の肩を両手で掴んで目を見た。

「あのな、ガレットはともかくマーモットは【機関】側の人間だ、仲間なんかじゃない」

ひどい一言だった、苦楽をいままで共にしてきた仲間を仲間じゃないと否定されたのだ、正直怒りがこみ上げてきたが今は抑えた、ヘレンはポケットから地下都市のマップが記録された小型の液晶装置を僕に渡した。

「使い方は分るな、脱出には昇降機を使うほかない電源を切られたらゲームオーバーだ。人工知能が死んだ今、上は血眼になってシステムの復旧を急いでるはずだ、早く行け」

「ヘレンさんはどうするんですか？」

「…武器を取ってからお前たちと合流する」

僕は最後に「了解」と一言。昇降機の電源が切られるまで残り「

70分」ガレットとマーモットに早く伝えに行かなきゃ!!

マーモットの家につく、いま帰ったぞと言って玄関から上がるし
かしマーモットの姿がない、どこかに出かけているのだろうか？ふ
と机の上に目が行った、書置きがあったのだ。そこにはよほど慌て
ていたのだろうか走り書きで「早く逃げて」とだけ描いてあった。
どういうことだ？非常事態か？とりあえず落ち着くんだ俺、特に俺
は今回悪い事なんてしてないぞ：ベレスに”ちゃん”付けした以外
では。

まさか！ベレスまだ根に持ってるのか？これ以上刺されたら切れ痔になってしまう…わかったぞ、それを見越してこんな書置きを…なるほど。

”恥を知れこの馬鹿！”俺の中の何かがそう叫んだ、答えが違うのか？だとするとなんだまったく分らない。

「ガレット！！」

玄関から靴を履いたままベレスが慌てて家の中に入ってきた、何事だ？

「ここにはもういられない、脱出するよ！！」

俺の腕を引っ張って家から強引に出る、事情がありそうだが今は詮索はよそう。さっきの書置きと関係ありそうだ。玄関を出て秋葉原の大通りに走り出る、なんだ？朝でも夜でも賑わってるこの場所が今日は人っ子一人もない？気味が悪い背筋が凍るような感覚がする、それになんだこの殺気に満ちてる空気は！！？…道路の向かい側から黒いガスマスクに黒いコートを着た数十名の集団がこちらに向かって歩いてくる。

途端にベレスの持っている小さくて四角い物体が赤く点滅し警告音のような音を出す。嫌な予感しかないそれに付け加えてさっきから出てる殺気。

「強化兵士の部隊…」

「強化兵士？なんだか知らんが敵か？」

「そうだよ…僕たちを始末する為の部隊、ただじゃ通してもらえない」

なんだか知らないがここは俺の出番のようだな、相手を見る限りだと銃や刃物といった武器を持ってるわけでもない、男らしく拳でぶつかって来るようだ。そういうの嫌いじゃないぜ。

「ベレスお前は先に行け…あいつらの相手は俺がやる」

「ガレット……じゃ約束だ必ず昇降機のところまで来てね、この時間「60分」だから。」

「ああわかった」

強化兵士たちはベレスは放っておいても良いだろうという雰囲気だ、馬鹿どもめあいつを野放しにしておくのが一番危険だ。

俺は足を大きく広げる。

「あっし名をガレットと申します、元ギルドのボスにしてこの貫禄でやってきたのですが愛ゆえに仲間を失い、いまはその愛の為に生き抜くと心に誓いを立て、ここまでやってまいりやした。故にこの先通してもらわなければその愛のを貫くことは出来ませぬ。さあ覚悟!」

強化兵士たちが走って向かってくる。

ガレット…無茶しやがって…僕はお前みたいなのでもいなくなったら寂しいんだぞ家族なんだから…そうだまだガレットに家族のお話してなかった、もし生きてここから出れたら言っておあげよう。みんな家族だって。

僕は走り続ける昇降機に向かって…マーモットならきつと大丈夫だ…。

「ねえどこにいくのベレス？」

「あ！マーモット丁度いいところに！！」

マーモットの持っている銃の銃口から煙が上がってるのが見える、足から血が出る、撃たれた…痛くない…痛みなんかより、悲しみが溢れてくる…仲間に家族に撃たれた…どうして？ねえどうして？なんでなんでなんで？胸が苦しくなる、あ 始まった体がまた戦えっ

て言ってるんだきつと、けどなんで仲間と？ 僕嫌だよ、それとも何か本当にマーモットは【機関】なんかに支配されてるの？ 嫌だよ：嫌嫌嫌嫌嫌嫌：いやだそんなの：だったら。

「マーモット：悪く思わないでね」「ベレス：悪く思わないでね」「こうしないと、僕は殺されちゃうから」「こうしないと、私は殺されちゃうから」

マーモットは泣きながら銃を片手に一丁ずつ持つと撃ってくる、不思議だな地下なのに雨が降ってるような感覚がするよ君が泣いてると。僕のスローモーションが始まる、マーモットの弾を避けるそしてこっちも銃で反撃：なんだろう背中が痛い何かに押されてる、僕の撃った弾が僕のほうを向いてる。背中から血がでて痛いなんで？ 弾は避けたのに：くっそー痛い、僕の撃った弾は今日の前にあるの一刀両断した。

「そうこれが”銀色の魔女”の本質さ！！ベレス君！！ ひゃーっはっはっは！！」

うるさいなあ誰の声だかもう分らないや、マーモットが銃をマシンガンに持ち変える、走りながら僕を狙わずに撃つ、おかしい僕を狙ってないのに弾は僕に飛んでくる：避けたらさっきみたいになるから、全部刀で弾こう：。カキンという音を立てて弾が弾かれていく、そして地面に落ちるさっきみたいに軌道を変えて襲ってくることはないだろう：はっ！！しまった弾に気をとられてたらマーモットを見失った！背筋に違和感が走る、銃口の形だ皮膚を伝わってその形が分る：若干背骨から左にずれてるな：ああそうか心臓を狙ってるんだ：。

銃口から弾が放たれて僕の心臓付近を弾がえぐっていくそして貫通する：あーあここで終わりかよ僕の人生：最悪だな、結局何一つ

守れやしないんだ僕は。

「許してえベレス…せつかく家族になれたのにこんなあ…」

「泣かないでよ…マーモット…まだ死ぬって決まったわけじゃないだろう。」

「もうだめよだって、こんなに血が…」

「最後にお願いだマーモット、自分の人生は自分で決めて生きるんだ、だれにも名前を奪われないで自分で決めて生きてく、それくらいできるよねもうお仕事は終わりだよ。」

「わかった…わかったよベレス……ねえベレス…聞こえてる？ねえ返事はねえベレス…いつもみたいに笑ったり呆れて怒ったりしてよ、ねえ！！…ああああああああああああ！！！！！」

「感動の最後は終わりましたか？マーモットちゃん、ヒッヒッヒッヒ、ヒャーッハハッハ！！これはもうたまらねえな！！ああ傑作のバッドエンドじゃねえかああ！！！」

耳障りな声が響く、殺す……殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す！

ブレイクブレイン（後書き）

さあ次回からマーモットの本当の戦いが始まります。
あとガレットとヘレンもねw
はたして大量出血してしまったベレスはいかに…。

死屍累々（前書き）

ベレス…世界を旅する少年、よく女の子に間違われる【アウトサイダー】

マーモット…黒いコートを着た綺麗な姿の【機関】の少女

ガレット…【ギルド】のボス、とっても怖い顔をしてる筋肉ムキムキ

Dr. ヘレン…【機関】の一番えらい研究員、いろんなことをしてる。戦闘もできる、女性。

ホーネット…【機関】の人事を取り仕切ってる、マーモットと同じくらいの歳、陰湿な性格で人の不幸を喜ぶ。

【ギルド】…無秩序を楽しむ集団

【機関】…地下に大都市東京を再現している、楽園を追い求めてその力で外の世界へ出てもう一度暮らそうと願っている多くの人々の集団。

【アウトサイダー】…【機関】が外で暮らす人々を呼ぶ時の一般的な総称

死屍累々

「標的の抹殺だマーモット」

そういつて上層部の人間の一人が私に一枚の書類といくつかの写真を渡した、ベレスとガレットとヘレンが写真に載っていた。書類のほうにはベレスが一番の最優先ターゲットとされていた、こんなこと描く奴ホーネットくらいだろう。だが私は従うほかない、いままでも衣食住を与えられてきた【機関】に逆らえばそれこそ身を滅ぼす事になる、上層部は逆らうものあれば確実に力でねじ伏せようとしてくるつまり、血眼になって殺そうとするのだ。

私は殺されたくないだけなのかもしれない、それ故に仲間を犠牲にするなんて私はなんて酷なんだろう。

「命令だ、さあいけ！」

命令には従うように育てられた：この言葉は一種の暗示の言葉のようなものだ。実際私にはそれが揺らぎつつあった、仲間を得るという環境下でいままでも私にないものが出来たからだ。

「つぐ、なんなんだこいつは」

強化兵士の一人が声を上げて言う、その兵士の目の前にはいくら攻撃を受けてもビクともしない筋肉もりもりマッチョマンがいた、ガレットだ。ガレットはかつてギルドのボスだった、故に戦闘がない日、などありはしなかったその幾多の戦いを、生き抜いてきた戦士でもある。

「もう終わりか？」

腕を組んで仁王立ちをしたまま攻撃を受け続けていた彼はそう言う、強化兵士たちは身体能力こそ格段に上がっているものの戦闘技術に関しては【機関】では底辺だ。そんな者と実戦経験が豊富な戦士とじゃ天土地の差だった。ガレットは仁王立ちの状態から姿勢を楽にする、そして目を閉じて右の拳を握り意識を集中させる。

「まず一人目、せいやああ！！」

目を開けるガレットの拳から放たれた暴風はまるで弾丸の如く、強化兵士の一人を貫く。貫かれた兵士は死んでいた暴風が当たった体の一部は吹き飛んでいた肉がはがれて骨がむき出し、ピクリとも動かない人間離れした彼の力の前には誰も敵わない。もはや対立すれば死あるのみ。

「出来ればもう残りは殺したくない素直に退いてもらえぬか？」

強化兵士たちにそう問いかける。

「…逃げるか？」

「なに言ってるんだ、ここで逃げたってどうせ【機関】のお蔵入りだ…」

一人の強化兵士がガレットの前に立つ、そしてガスマスクを取って話しかけた。

「俺たちは【機関】のモルモットだ、ここで殺されなきゃ【機関】でまた実験台にされて失敗したら殺し捨てられる…だったら俺はここであんたに殺されたほうが幸せなんだ頼む…構わずやってくれ」

その話を聞いたガレットは声を上げて笑った、そして強化兵士たちはポカーンとなるなぞ笑っているのかと？彼はしばらく笑ってから一人の強化兵士にこういった。

「命は粗末にするもんじゃねえ…だがどこにいてもお前らはもう逃れられない宿命か？」

「ああ、だから頼む」

その兵士は一瞬で動かなくなった、頭蓋骨に穴が開きその穴は後頭部のほうまで貫通していき血が噴出す。ほんの数秒だったガレットの指には一瞬だった故に血が一滴も付いていない状態だ、そして他の兵士たちも同じように貫かれていった、抵抗するものはいない死んだほうがマシな状態にまで追い込まれた者たちはこれが最高の幸せなのだろう、数十名の兵士たちの血で道路は血の海となった兵士たちは死以外になにも望みはしなかった。

「あーなんだかすつきりしねえなあ：死んで報われる幸せなんて俺は正直どうかと思うぜそれでもお前たちは良いって：やっぱり人間はよくわからない。」

彼はそう言っではるか遠くの昇降機に向かって走り出す。

ヘレンは施設から出来るだけの武器を持ち出す、そのほとんどがナイフだ体のや衣服のいたるところに隠すことが出来るのでナイフほど隠密なものはないだろう。ヘレンは女性だが頭がいい上に機転の利いた戦闘を得意とする、彼女の目の前に立ちふさがった一人の兵士の、のど下にはナイフが刺さっていた投げられたナイフだった。そのナイフを引き抜く前に、他の兵士たちが銃をヘレンを向けて撃つヘレンはナイフが刺さった兵士の遺体を持ち上げてそのまま盾にしてまっすぐ兵士たちのところへ向かって走る、そして弾が切れると同時に遺体を彼らに投げ捨てて怯ませその隙に、腕の関節を取り

足を払って倒れたところで首の頸動脈を切断。噴水のように飛び散った血が白衣を真っ赤に染める。

施設の外は一般人がほとんどいない、どうやら機関が避難を促したようだ人を隠すなら人の中と言うものの、これでは物陰に隠れる他ない。

「ん？あれはガレットか：ベレスはいないようだな先にいったか？」

ガレットが兵士たちを殺したあとの姿を後ろから見ていた、ふと一人の兵士の服を見つめる：

「これを着れば変装できるな：すまないが借りるぞ」

死体から服を脱がせるそして白衣を脱ぎ捨ててその黒いコートとガスマスクを着る、そしてガレットとは別方向で昇降機へ向かった、変装した上にコレといって大した障害もなく誰よりも先に昇降機にたどり着けるかもしれないと思っていたときだった。

目の前に雨の降るような異様な光景を目にした。そして後ろからガレットが追いつく、目の前で起こったことそれはマーモットがベレスの背中を銃で撃つといった余りにもむごく残酷な一部始終だったマーモットとベレスの二人は何かを最後に話していた。マーモットはベレスの上半身を倒れる寸前で支えるたまま叫びだす。

「わかった：わかったよベレス……ねえベレス：聞こえてる？ねえ返事はねえベレス：いつもみたいに笑ったり呆れて怒ったりしてよ、ねえ！！……ああああああああああ！！！！」

「感動の最後は終わりましたか？マーモットちゃん、ヒッヒッヒッヒ、ヒャーッハハッハ！！これはもうたまらねえな！！ああ傑作の

バッドエンドじゃねえかあああ！！」

ホーネットの姿が近くの隣家の屋根にあった、ガレットは二人の下へ走って行くそしてその走ったままの勢いで飛び上がってホーネットに一撃あびせようとする。

「わぁっと、やれやれあぶないですねえガレットさん一体なんですか？……人がせっかく最悪の場面楽しんでのによおおお！！」

ひらりと拳の一撃をかわして今の状況を短く語る……そしてガレットの頭を指で一突きする、一突きされただけでガレットは動けなくなった、飛び上がった状態からだったので頭からまっさかさまに落下。

「あなたはしばらく動かないでくださいねえ……俺はこれからあつちの魔女に用があるんで」

ヘレンがガレットに駆け寄り大丈夫かと聞く、ガレットは身動きが取れないホーネットを殴ろうとしたその一撃を放った状態のまま石のように固まってしまっている、ヘレンが懷から酸素スプレーのうなものをガレットの口にあててトリガーノズルを押す、ガレットの体の硬直が解けて自由に動けるようになった。そして上体をゆっくり起こして首を摩る。

「あいつ……何者なんだ？」

「人体改造の最終兵器にして、【機関】のブレイキ役だつまりはゴミ処理のエキスパートだ」

「ゴミ処理って……まさか」

「そのまさかだよ、逆らいそうな者を片っ端から殺していくそれも自分の手を汚さずにな」

ヘレンとガレットの二人はベレスの元へ駆けつける、マーモットはホーネットが昇降機に向かっていくのを見てその後を追う。

「ガレット手伝え、ベレスの治療が先だこいつまだ完全にはくたばっちゃいない」

「お、おう!!」

ガレットがベレスの上体を持ち上げ背中中の弾丸の傷をヘレンに向けて見せる。ヘレンは道具箱から包帯を取り出しガレットに使った酸素プラーの様なものをガレットに渡して口に当ててトリガーノズルを押すように支持した。

「なんだ…傷が塞がってく?なんだこの自然治癒の速度…ありえない」

「どうしたって?ベレスは生きてるのか?」

「いや、生き返ってるんだ…確かに一度死の淵に落ちたものの…どういうことだ、一応血液採取しとくか」

注射器を取り出し真空状態の容器に注射器の針を移して採取した。それと一応と言って傷の一部分に消毒液をたらして塗り広げておく。

マーモットはホーネットを追いかけてエントランスホールへ行く
真っ白で綺麗なタイルの上に二人の黒いコートを着た人間が立つ、
マーモットの目が赤く充血しているその瞳に写るのはいままで自分
の上であぐらをかいて座っていた憎きホーネット。

「【機関】には戻らないわよ…」

「彼を撃ってから自分の道を見つけたって遅くないか？ 本当の馬鹿
っていうんだぜそれを、ひゃーっはっはっは！！」

「その減らず口今すぐ穴だらけにしてあげるわよ」

そういつてP90と呼ばれる装弾数のとっても多いサブマシンガン
を両手に装備してフルオートで打ち出す、弾丸が白いタイルの穴を
開ける前に念力で捻じ曲げられすぐにホーネットを追尾し始める、
ホーネットはコートから長い鎖を取り出す。そして弾丸を全て鎖を
使って弾き返す、そのまま鎖を天井に刺すとぶら下がるようにして
揺られながら銃を適当に乱射する。

「ほらほら！！！！いくぜえええ！！」

「ちっ！相変わらず嫌な攻撃ね、けど鎖は一本だけなのはお見通し
よ…」

そう言うのとP90に弾を装填して、鎖を撃ち続けるやがて亀裂が
入ってパキンという音を立てて鎖がホーネットの手元の当たりから

切れてホーネットが落ちる。落ちて地面に手について着地するものすごい速さで距離を詰められるマーモット、ホーネットはそのつめた勢いで拳をマーモットめがけて突き出した。だが拳から下の手首を掴まれ投げ飛ばされる、一本背負いが決まる。ホーネットは受身を取れずそのまま背中か落ちて衝撃をもろに受ける、そして手首をつかまれたまま倒れている上体から肘を体の内側へと本来曲がらない方向に思いっきり足で蹴られ骨が碎ける音と共に右腕が吹き飛ぶ。

「ぐああ！！素手格闘まで出来るとは誤算だったぜ：はあはあ、くっ：そ右腕が」

左手でマーモットの頭を触ろうとするがバックステップでかわされる。

「あなたは人の頭に触れられなきゃ脳に干渉できない：そんなことくらい知ってるわ、これでお別れね」

懷から手榴弾を取り出してピンを抜いて投げつけるマーモット。

「チクシヨウ：」

跡形もなく吹き飛び残っていたのは白いタイルだけ、醜惡なホーネットの姿はなかった。緊張が一気にほぐれてペタンとその場に座り込む。後ろからガレットとヘレンが駆けつけるベレスはガレットが担いでいた。

「ベレス生きてるの？」

「ああ、どういふ訳か生きてるらしいぜ」

「外にでたらたっぷり検査してやるか」

4人は昇降機を使って【機関】の外へ脱出する、とても長い二日間が終わった瞬間だった。

「はあ：チクシヨウまさか素手格闘とは：いままで銃に頼り切つて
と思つたら別のこともしつかりできんじゃねえか、それにしても
驚いたぜ偶然上にいたタイルが非常通路につながてるとは」

「ホーネット…」

「なんですかあ？総督閣下？仕事をしくじったから実験台になれとでも？」

「いや、新しい右腕だ機械だが貴様の助けとなるだろう仕掛けを沢山施させた代物だ」

「ほお…こりやなかなか使い勝手もいい」

総督閣下と呼ばれた男とホーネットが地下の奥深くで話し合ってる姿があった。

死屍累々（後書き）

脱出編オワタ…ようやくオワタ疲れた…

三日後（前書き）

ベレス…世界を旅する少年、よく女の子に間違われる【アウトサイダー】

マーモット…黒いコートを着た綺麗な姿の【機関】の少女

ガレット…【ギルド】のボス、とっても怖い顔をしてる筋肉ムキムキ

Dr. ヘレン…【機関】の一番えらい研究員、いろんなことをしてる。戦闘もできる、女性。

ホーネット…【機関】の人事を取り仕切ってる、マーモットと同じくらいの歳、陰湿な性格で人の不幸を喜ぶ。

【ギルド】…無秩序を楽しむ集団

【機関】…地下に大都市東京を再現している、楽園を追い求めてその力で外の世界へ出てもう一度暮らそうと願っている多くの人々の集団。

【アウトサイダー】…【機関】が外で暮らす人々を呼ぶ時の一般的な総称

三日後

人間の自然治癒とは自然界から与えられた、恒常性^{ホメオスタシス}が原動力となっているこれは遺伝子に刻まれたものであつて何らかの原因で壊れたりしない限り、通常の回復力となるが。もし何億分のいくつかの確立で遺伝情報に齟齬があつた場合どうなるかは誰もわからない。また一つの遺伝子の狂いが他の体の構造成分のバランスを壊す確立もある。

――――もし本当に壊れた人間がいたら？

【機関】の地下都市を脱出してから三日間、ベレスはまだ眠ったままの意識不明のままだ。心臓は動いているが、今は一種の脳死状態の人間の様になってる。だが脳への外傷は一切与えてなかった：私は与えなかったあの戦いの中で確実に殺そうとはしなかった：もうあの時点で【機関】への忠誠心は揺らいでいた、それでも半分は振り切れていなかった為にベレスを瀕死まで追い込んでしまった。

ところでそろそろ突っ込んだほうがいいのだろうか、このガスマスクの強化兵士は誰？

「ガレットあいつだれ？」

「Dr. ヘレンだ、人工衛星の修復の時に一緒にいた：なんであいつまで付いて来てるかは知らない：いい加減マスク取れよヘレン」

「あ、すっかり忘れてた：いっけねえー」

そうか忘れてたのか：三日間もこういう時声を出してすっかり突っ込んでくれるベレスが寝たきりとは本当に悲しいものだ、ある意味。

「自己紹介が遅れたな私はDr. ヘレン、すっかりベレスに【機関】の人工知能の管理室を見せて：うんまあ：そういうことだ」

うっかり見せて【機関】のお蔵入りにされなくなかったから、逃げてきたんですね。わかります本当にありがとうございます。本当…本当にベレスの突っ込みがほしいです…助けてください。

私と言えることじゃないけれど、これほどまでに彼の存在が恋しいことはなかった：私は丁寧にお辞儀をして彼女に敬意を表し自己紹介を済ませた。

「ふむ、しかしマーモット：お前」

ヘレンは何かを言いかけると私にじりじりと歩み寄ってくる、そして私の胸を驚掴みにした。

「フギャー!!」

「こんな脂肪の塊のどこがいいんだー!! ちきしょう!! 80以上はあるなくっそ：!!」

「あーヘレンずるい俺もー」

持っていたP90の銃口をガレットの、口の中に押し込んでやる。ああこれがいつもベレスがこいつに冷たくする理由か：今よく分った。

「このままトリガーを引いてもガレットなら生きてそう…」

「すいません、もう胸を揉もうとけません流石にこれだったら俺も死ねます。はい本当すいませんでした。」

反省しているようなので許してやった、ヘレンがそこで寝かせているベレスの血液を採取する。そして大事そうにアタッシュケースに採取した血液をしまう。アタッシュケースの中には他に色々な機械らしき物が沢山入っていた。いったいなんに使うものだろうベレスなら分ったかもしれないけど：私には見当もつかない。機械の一

つに血液が入った試験管をセットするとスイッチを入れた。

『遺伝子解析します……パターンX、未知の遺伝子結合パターンです』

「にやんだとおおおお!!」

猫語になった……シユールだ。そんなことはさておき彼女の持っていた機械はどうやら人間の遺伝子を血液から分析する機械のようだ。未知の遺伝子結合パターンとはなんだろう？

「どういふことなのヘレン……その未知のパターンって」

「いままでこんな人間は、いなかった人間ってことだよ」

「そーなのカー、意味がわからんぞ俺は」

「説明しよう!! 遺伝子とは体を作る情報の集合体みてえな物だ、DNAとかいわれたりもすんのかな？ 貴様らも同じようにこの遺伝子というものによって作られているんだ、だがそれには必ずしも全員が同じではなくともパターンがあつてな、それがベレスの遺伝子はいままでなかったパターンになつてゐるわけだ」

なにをいっているんだこいつは？ 早く病院かなにかに見てもらったほうがいいんじゃないだろうか……。それとも私の理解が追いつかないのか。

「う、うわああああ！！………はあはあ…生きてる？」

目が覚める、太陽が空にはあった為すぐにここが【機関】の中ではない、外であることがわかった。脱出できたようだ。周りを見渡すとマッチョと銀髪とサングラスをした変なトリオがいた…。っていうか僕の仲間だった…いま改めて思う、こいつら変だ。

たしかマーモットの攻撃を心臓に食らって…傷口は塞がってる…心臓ははずしたのか？ いやでもあれは確実に死ねるはずだ…まあいいやとりあえずいまある命に感謝しよう。三人は僕が起き上がったのをみて、マーモットは泣きそうな顔だ…ヘレンはサングラスを取って不思議そうな顔をする、ガレットはにっこり笑っている。

「ベレスウウウ…私…わたし…あなたにひどいこと」

「うん、あれは痛かった」

「起きたか、救世主…新たな目覚めはどんな気分だ？」

「え、特に何も…ヘレンさんが中二病なのは分るけど」

「ようやく起きたか」

「以外にもガレットが一番普通なりアクションを取った件について…」

こいつらかわってねえけどやっぱり変だ、変なのが普通か…世界中探したってこんな奇妙な集団はいないだろう。まあ僕たちらしくていいか、ところでここはどこだろう？

「ねえヘレンさん…ここはどこ？」

「”さん”は付けなくていい、えーと断崖絶壁を降りてとりあえず三日間南下してきたわけだから、茨城のあたりだとは思う。」

「そう…ねえ三人とも断崖絶壁をどうやって降りたのかな？なんかものすごく背中と腹筋が痛いんだけど」

マーモットがガレットを僕の方向に蹴り飛ばした、犯人確定ってわけか。

「ガレットがベレス担ぎながらダブルリアットして降りた…」

「やってくれたじゃないかこの変態」

「いや…ベレスが起きないのが悪いんだし…そうだよな？ヘレン？」

ガレットはヘレンに助けを求めるような眼差しで見つめるがヘレンはサングラスをかけて、そっぽかれてしまった。よし贖罪の準備はできてるな…刀…あれ？背負ってた刀がない、銃もない！！ああ、脱出のときになくしちゃったか、まあいいまだ病み上がりだし今回は勘弁してやろう。

「そーいやさっきガレットが土を思いっきり掘ってなにか埋めてたのを見たぞ」

「ヘレンそれどころ辺？」

「ちょうどそこら辺だぞ、土の色そこだけ違うな」

ヘレンが指差した場所を手で掘って行くと土だらけの僕の装備があった…このやろう！！

「ギャー!!」

ガレットの叫び声がどこまでも響いた：なぜかはわからないがものすごく落ち着いた。いつものことがいつものように行えたからだなきっと。マーモットがP90を空に向かって撃つ…。

「祝砲だよ?…」

「なるほど、マーモットは自分で道を選べるようになったんだね」

「うん名前も、もう捨てようかな【機関】なんかの言いなりだった頃の名前なんて、ねえなんかいい名前ない?」

ヘレンがにやりと笑う：まさか中二な名前を付けようしてるんじゃないだろうか：まずいぞ!!この顔は完全にそういう顔だ!!早いとこなんかいい名前を思いつかないと：なんか出てこないかな：クソこういう時に限ってどうして出てこないんだ。そんな時に風がひと吹きした。

「フロルなんてどう?昔のスペイン語で花という意味なんだけど」

「うん、ベレスがそれでいいって思うなら」

「チッ」

ヘレンが舌打ちをする：よかった先に言えて。

「ガレット二号なんてどうだ?」

「竜巻旋○脚!」

空中をグルグル回りながら飛んで蹴りで攻撃する必殺技の名前をいってガレットを蹴る、しかしこいつ本当に戦闘や力仕事以外でろくなことしないな…。

いつもの三人プラス一人、これから先が心配だが何とかやっていこうと思った。

三日後（後書き）

今後マーモットはフロルって名前で呼ばれます、はい。

あと新キャラのプロフィールコーナーです

名前…【ヘレン、Dr. ヘレン】

性別…女

特技…ナイフでの機転の利いた戦闘、変装、ガラクタ工作

容姿…白い白衣を着てる【驚きの白さ！】、貧乳、黒髪、顔立ちはそれなりにいいけどサングラスで隠してる。

詳しい説明

【機関】の地下都市に住んでいた一般市民だったけど頭がいいことということで研究員に抜擢されて人工衛星を直してた、飛ばすのにはロケットが必要だからロケットも作ろうかなと思ってたころ、ヘマをやらかしてベレスたちと脱出し行動を共にすることになった。脳内改造を受けて瞬間移動の能力を持っていたけどホーネットに脳干渉を受けて能力を消されてしまった。中二病で当時は閃光のヘレンと自ら名乗っていたらしい

けどよく調子に乗って規則をマモレナカタ。4人目の仲間で4人というとテイルズを思い出しますね、そういや某主人公は騎士学校を卒業間じかにして、オヤジの死亡を聞いて地元の領主を告ぐため中退するけど弟に地元を乗っ取られて、職を失い

無職になった…NEETの職業は自宅警備員だけどこの主人公自宅をマモレナカタ。

戦闘不能になったりしてもマモレナカタっという。そんな感じにする予定だったんだけど笑いを入れていくうちにそんなキャラじゃなくなってしまった。

戦闘訓練って結構厳しい…（前書き）

ベレス…世界を旅する少年、よく女の子に間違われる 遺伝子が他の人間とは作りが違う【アウトサイダー】

フロル…白いコートを着た綺麗な姿の【アウトサイダー】の少女、以前はマーモットと呼ばれていたが、【機関】を抜けた際名前を捨てた

ガレット…元【ギルド】のボス、とっても怖い顔をしてる筋肉ムキムキ

Dr. ヘレン…いろんなことをしってる。戦闘もできる、治療もできる女性。

ホーネット…【機関】の人事を取り仕切ってる、フロルと同じくらいの歳、陰湿な性格で人の不幸を喜ぶ。

【ギルド】…無秩序を楽しむ集団

【機関】…地下に大都市東京を再現している、楽園を追い求めてその力で外の世界へ出てもう一度暮らそうと願っている多くの人々の集団。

【アウトサイダー】…【機関】が外で暮らす人々を呼ぶ時の一般的な総称

戦闘訓練って結構厳しい：

この世界で生き残りたいければ戦い方を学ぶ他ない、ほとんどの人間がそれを実戦で体得しているが僕は違う。本や雑誌で学んだ程度で実戦で使えるのは、ほんの一部：故にこの中では一番弱い。いままでは運が良かったり、誰かに守られたりしてきた：そんなのはもう嫌だ：強くなりたいみんなを守る強さが欲しいよ、みんなは強くていいなあ。

まず最初にやらなきゃいけないことは戦闘訓練、この戦闘訓練は獣や外敵から身を守るためではなく…人間と、どうやって戦ったらいいかを学ぶのが目的だ。僕はみんなに戦い方を教えて欲しいと頼んだ。みんなは別に構わないという顔をして僕を見たまず基本をガレットから教わる事になった。

「いいか、戦闘で勝敗を分けるのは大体が距離のとり方だ…銃は遠距離、刃物は近距離」

「ふむふむ、そりゃわかってる」

ガレットの話をよく聞く、距離についての説明をされる。銃はなら遠距離なら勝てるそして刃物は近距離では銃よりも早く機能できるため近距離では刃物が有利。これは刀を良く使う僕は良く知っている。だが刃物よりも早く機能する武器があるらしい。

「拳は人類最強の攻撃手段だ！」

「そりゃあんたはそうだろうね」

「いやベレス、これは全人類共通のことだ…体術は古くから学ばれてきている事だ」

「そーなんだ…」

体術はいろんな流派があるが、ガレットはそれをすべてマスターしてるとかしてないとか、そして戦闘の基本は体術にあるとか言い出

した：今回はそれを信じることにしよう。いくら馬鹿でもいままで戦闘ではよく役に立ってる。僕はガレットに即戦力になる体術である合気道を教えてもらった相手の力を利用して倒すことができるらしい：非力な僕には丁度いいだろう。ガレットで試して見るか

「いたたたた！！！！いったいそんな細い腕してどんな握力してるんだ！！！」

「おっかしいなあ：まだ背負って投げる途中なのに痛がるなんて」

この僕たちの様子をサングラスをかけた白衣のヘレンが観察していた、なにかブツブツいつているようだ：中二病だから放って置こう。数時間して合気道は僕には向かないことが判明ある意味すごいダメージを与えられてはいるが：形にならなかった。今度はテコンドーを習う事になった、テコンドーは両手に武器を持った状態でも、足を使う武術なので問題ないらしい。

「よし！！こい！！受け止めてやる」

ガレットが受け止めるための体制を取る。

「たあ！！オラオラオラオラ！！」

「フン！！無駄無駄無駄無駄無駄！！」

女性二人はすこし離れたところから観察をしている。ヘレンとフロル：フロルはこの前、名前を変えた変える前の名前はマーモット：【機関】が勝手につけた名前。そして何かを喋っているこうしてガレットに蹴りを打ち込んでいる間、少しだけ何を喋っているか聞き取れた。

「なんかジョ○ヨとディ○見たいになってるわね…」

「確かにそうだな！」

これはまずい突っ込みを入れるべきだ！！そろそろ終わりにするか。

「ガレット、もういいかなテコンドーが便利なのは分ったから」

「そうだな、この短時間でここまで上達するとは結構早いし…十分だな」

その分この短時間でかなり体力を消耗してしまった…しばらく休憩しよう、こうしてる間にも【機関】は”楽園”をさがしてるんだろうな…。

数時間前へレンが【機関】の極秘データをUSBからノートPCに移しそのデータを見ることに成功した、極秘データには【機関】の目的について記録されていたそれは”日本”の復活と世界制服…なんだか安直だがこれはこれで結構危険だ、あんな奴らに世界が支配されたらそれこそ罪も無い人間が沢山犠牲になってしまう…罪もないといえは僕の両親を思い出す。

戦闘訓練って結構厳しい…（後書き）

今回は短いけどかんべんしてえ

戦闘訓練って結構厳しい…その2（前書き）

ベレス…世界を旅する少年、よく女の子に間違われる 遺伝子が他の人間とは作りが違う【アウトサイダー】

フロル…白いコートを着た綺麗な姿の【アウトサイダー】の少女、以前はマーモットと呼ばれていたが、【機関】を抜けた際名前を捨てた

ガレット…元【ギルド】のボス、とっても怖い顔をしてる筋肉ムキムキ

Dr. ヘレン…いろんなことをしってる。戦闘もできる、治療もできる女性。

ホーネット…【機関】の人事を取り仕切ってる、フロルと同じくらいの歳、陰湿な性格で人の不幸を喜ぶ。

【ギルド】…無秩序を楽しむ集団

【機関】…地下に大都市東京を再現している、楽園を追い求めてその力で外の世界へ出てもう一度暮らそうと願っている多くの人々の集団。

【アウトサイダー】…【機関】が外で暮らす人々を呼ぶ時の一般的な総称

戦闘訓練って結構厳しい…その2

近距離での戦闘は刀で十分だと思ってたところがあつたけどガレットとの戦闘訓練で、まだまだ自分が甘いことが分った、今回のことは感謝してもいいだろう…それ以外はろくな事をしない奴。

でもよくよく考えたら素手格闘を習っただけだ、武器メインの戦術習ったほうが自分には有利のような気がする、なにやってんだろう僕。

「ヘレーン」

「なんだ？今度は刃物の扱いでも学ぶ気か？」

「正解だね、教えてくれ」

ヘレンはアタッシュケースから色々なナイフを取り出した、一度それらのナイフを僕に見せてどういった特徴があるのか、またはどんな扱い方や、種類があるなど色々教えてくれた。そしてそれを地面にばら撒く

「特徴その一…ナイフは体や衣服のあらゆる場所に隠せる、目を三秒閉じてろ」

ヘレンの言う通りに三秒間だけ目を閉じて、そして目を開けるとナイフが全部消えていた…いまの一瞬でどこに行っただんだ？

「さあてナイフはどこにあるでしょう…正解は私の白衣のいたるところにー」

白衣をパタパタと叩くとナイフが衿や袖の内側からジャラジャラと落ちてきた、正直驚いたこんな沢山のナイフを一瞬で体に身につけるのは、神業だ。

「まあこれは私が白衣だからできること……お前にはそうだな七本くらいやるよ、頭を使ってそれを隠して見ろ……それと特徴その二だ、急所を狙えば究極の暗殺道具にもなる」

「暗殺？」

暗殺とは（あんさつ）は、主に政治的、宗教的または実利的な理由により、要人殺害を密かに計画・立案し、不意打ちを狙って実行する殺人行為が一般的に言われるが、ヘレンはこれは暗殺とは言わないと言った。暗殺とは今のこの荒廃した世界においては、その意味を成さないからだ。

相手の持ち物を奪ったり、自分が生きるためには殺すしかない、そういった状態の時、証拠をできるだけ残さないようにし標的を殺す事をいうそうだ。

「証拠は別にあってもいいんじゃない？」

「わかってないなあ、敵討なんかにあったら嫌だろ……だから証拠は極力控えろ」

「はい」

「それじゃ特徴その三だ、遠距離武器にもなる」

そういつてヘレンはナイフを近くにあった枯れ木に投げる見事に木の幹に刃の部分が刺さった。下手すればナイフの持ち手の部分が殺

害対象に当たって無意味にナイフを消費する事になるが、これにはコツがあるらしく遠い時ほど空中での回転を多くしたほうが刺さりやすいらしい。

だがヘレンはナイフを投げたときに手裏剣を忍者が平手で払うときのように回転が皆無の上体で刃が一定の方向を向いたまま飛んでいった。

「今の投げ方は力と風の計算が頭に入っていないとできることじゃない、慣れないうちは普通に投げてろ」

「はい、刀の方はどう扱ったらいいの？」

「ナイフ専門だから、刀はしらねーや自分で考えろ」

背中に背負ってる刀：ずっしりと重いが戦闘時は良く世話になってるけど使い方はむちゃくちゃだ。

「ベレスお前よく緊張状態や戦闘時や自分が危なくなると、急に胸が苦しくならないか？」

「あーなるなる、なんでヘレンがしってるのそんなこと…」

ヘレンは黙ったままで答えてくれない：困ったな答えてくれないと戦闘時に役立てることができない、しばらくするとヘレンはアタッシューケースから血の入った試験管を僕に見せた。

「こいつはお前の血液だ：調べて見たら異常な遺伝子だった良性ではあるが、コントロールできるようにしないと心臓に負担がかかる。」

「へ？コントロール？」

「体内の神経伝達能力や回復時の免疫向上、戦闘時は過剰なアドレナリンこれらの物質が一気に体中に回る仕組みになってる血液だ…脳をいじりでもしない限り無理なことだがお前は生まれつきのようだな」

ヘレンはそれだけ口にすると地面に座って休み始めた、ナイフの特徴や扱いは良く分ったけど正直”遺伝子”とやらの話はよくわからない。でもその遺伝子のおかげで今日も生きていられるんだ…ちょっとだけ感謝してもいいのかな？

僕はガレットとヘレンを通して近距離の戦術を学んだ、近距離戦闘はこれで多分前よりマシになったはずだ、近くにいたフロルがそろそろだなという顔をして僕に近寄ってきた。

「銃の良く当たる撃ち方でも教えようか？」

「うん！フロルは弾丸の起動だって変えられるもんね！！」

「いや、あれは【機関】で脳みそいじられて付けられた力でね普通はできないことなのよ」

【機関】ではヘレンやホーネット以外にも脳みそをいじられている人間がいるのは知ってたそういえば”銀色の魔女”ってまさかフロルのことかな？【機関】ではフロル以外に銀髪の人なんていなかったし…作業員の噂が本当なら彼女以外いないだろう。

そんなことはどうでもいい、いま考えてもしようがない事だ【機関】とはもう縁が切れたことだし、フロルはコートの中からあらゆる銃を取り出した、僕はそれらを銃としかいえないがフロルは銃の名前や特徴を教えてくださいました。

「まずこれ：ハンドガン片手でも扱えて軽いから即戦力になる」

「それは僕も持ってる、これはなんていう種類？」

黒くよく手入れされてる自分の銃をフロルに渡した。

「デザートイーグルね、口径が大きくて腕や足を打っても出血を止めなきゃ死ぬわ」

「こえええええ！でもガレットはこれが当たっても平気そうだな」

「はっくしょん！！」

誰かが俺の噂でもしているのだろうか？

「次あんたの番だぞ」

「ああ悪い悪い」

ババヌキというカードゲームを暇つぶしにやってる。

遠くのほうでくしゃみが聞こえる、ヘレンとガレットがトランプで遊んでいるのが見える：トランプなんてどこから持ってきたんだ？まあいいか

「ベレス、マシンガンは使い方わかる？」

「あんまり知らない」

マシンガンはフルオート、セミオート、単発に分けることができるらしい。この機能はあらゆる状況に合わせて使い分ける、隠密なら単発で確実に標的を仕留めるのが無難。セミオートは数人の敵が遠くにいる時、フルオートは激戦状態になったら（笑）

「P90二個あるから一個上げるよ」

「うっほマジで！」

P90の特徴は装弾数が多くて弾丸が鋭くて殺傷力がかなりあること、あたればそれなりに痛いと思う多分…。

三人全員から戦闘技術を学んだからこれからはいままでよりマシンになると思う。ガレットが変なことをしようとしてきた時により効果的な方法で撃退できるだろう！

戦闘訓練って結構厳しい…その2（後書き）

衝撃の落ち…あははははははは笑うしかない W
W
W

4人の行く道(前書き)

ベレス…世界を旅する少年、よく女の子に間違われる 遺伝子が他の人間とは作りが違う【アウトサイダー】

フロル…白いコートを着た綺麗な姿の【アウトサイダー】の少女、以前はマーモットと呼ばれていたが、【機関】を抜けた際名前を捨てた

ガレット…元【ギルド】のボス、とっても怖い顔をしてる筋肉ムキムキ

Dr. ヘレン…いろんなことをしってる。戦闘もできる、治療もできる女性。

ホーネット…【機関】の人事を取り仕切ってる、フロルと同じくらいの歳、陰湿な性格で人の不幸を喜ぶ。

【ギルド】…無秩序を楽しむ集団、世紀末ヒヤッハーな格好をしている。

【機関】…地下に大都市東京を再現している、楽園を追い求めてその力で外の世界へ出てもう一度暮らそうと願っている多くの人々の集団だが、裏では世界制服をしようと企んでいる。

【アウトサイダー】…【機関】が外で暮らす人々を呼ぶ時の一般的な総称

4人の行く道

荒れ果て、腐敗しきった世界に四人の奇妙な集団がいた。【ギルド】でも【機関】でもない、一人は背が低く刀を背負っている、赤毛でショートヘア青い瞳にとっても綺麗な顔立ち、女の子に見えるが性別は男性、名前はベレス。その後ろから付いてくる一人の女性は髪が銀髪で長く背が高い、白いコートを着ていた、名前はフロル。以前は【機関】に所属しマーモットと名乗っていた。さらにその後ろから付いてくる屈強な体つきの男性がいる、上半身は裸で下半身にはボロボロのジーンズ。元【ギルド】のボスで名前はガレット。そして最後尾には白衣を着てサングラスをかけ手には重そうなアタッシュケースを持った女性がいた、名前はヘレン。以前はフロルと同じく【機関】に所属し研究員として働いていた。

四人の向かっている先は廃墟と化した「横浜」といわれる都会の町、海辺に位置していてここ数百年での風と水の浸食で高いビルが3階まで海面の上昇と風化が見られる、廃墟と言っても人が住んでいない訳ではない。人が住み着く理由としては危険な動物から狙われることもなく外敵の侵入が非常に困難になっている上戦争があったところは激戦区だったため武器も豊富だ。

そこに着いた時の彼らの目的は活動の拠点を置く事だった、彼らの目的は”楽園”といわれる数百年前、日本で行われた化学実験の真相を暴き腐敗した世界を救う事。だが”楽園”を狙うのは彼らだけではない【機関】という組織が世界を完全なる支配を目的とし”楽園”を求めている。

彼らと【機関】は対立していて【機関】は彼らの息の根を止める事にいま必死になっている。

夕日が海面を照らしキラキラと輝く、「横浜」の海は激戦区であったにも関わらず汚染はされていなかった、人が入っても安全な海だ。ベレスが廃墟の一番高いタワーを目指して海面に入り泳ぐ他の三人も後に続く。タワー内部に入るには一度深くもぐり一階からエントランスを抜ける必要があるエントランスも無論浸水していて三階まで行くのに息が続かなければ溺死だ。

「皆、息吸って」

ベレスが後ろから付いてくる三人のいる方向を向いて言う、それを聞いた三人は各自、自分のタイミングで息を吸ってもぐっていった。海中内は夕日が差し込んでいてそれが乱反射し幻想的な光景をエントランスに映し出していた。エントランスに入り奥の階段を目指し無事全員三階に行き着く。

「ぶはあ…ふう、みんないるよね？」

ベレスが全員いる事を確認する。

「私はいるわよ」

「私もだ」

「あれガレットは？」

女性二人が返事をした後、一人いない事によく気がつくベレス。よく見ると潜った方がいいが上がってこれない状態のガレットが水中に写っているのが見えた。筋肉が体のほとんどの彼は水に浮くことができないようだ。ベレスはもう一度息を吸って水中に潜っていき階段のそこで足掻くガレットを水面まで引っ張り上げた。

「ぶうはあ！！…はあはあ死ぬかと思った、ありがとうベレス」

「まったく迷惑な奴め…これじゃ外に出る時どうするんだ？」

ガレットは水面から上がって近くにあった鉄製の椅子に座り考え始める。

「よし、思いつかない！」

「ダメだこいつ、早く何とかしないと…」

ベレスは呆れて言った後にようやく水中から這い上がる、三階のホールはガラス張りで水の音がよく反響する、それに付け加えて夕日がいい具合に中に刺していた。しばらくその場所で日に当たって、濡れた体と服を乾かす、フロルはコートを脱いでコートを手で絞って水を地面に落とす。

不意に上の階から音楽が聞こえてきた、四人は人がいるという事を同時に悟る、服を乾かすのをやめて武器を各自構えてガレットを先頭にして階段を上がる。足音を立てないようにゆっくり上がっていく音楽が段々近くなるそして六階に来たときだった、全身をアーマーに包んだ人物が銃を構えてこちらに向ける。引き金は指にはかかっていない敵意は余り感じられない。

「ここの警備員だ動くな！ここに何の用だ？」

「旅の者よ、今はね」

フロルが他の三人を代表して答えるすると警備員は構えていた銃を下ろす。

「そうか…まあ騒ぎは起こさないでくれよ、ここは皆唯一の平和を
実感できる場所なんだ」

警備員の忠告を黙って聞くと六階のホールに揃って出る、中央には
ステージがあつてその上で管楽器を演奏している人たちがいた、と
ってもいい音色が響く。時に激しく、時にゆったりと。

ベレスが見物客に混じって席に座って完全に聞き入っていた、他の
三人は演奏が終わるのをホールの隅で待っていた。しばらくして
演奏が終わるベレスは席を立て、三人の元へ戻った。ここに來た
目的は演奏を聴くことではなく、活動拠点を置くためだ。

「とりあえずここに人は住んでるみたいね、子供もいるし結構安全
そうね」

「そうだな俺は長い間歩いて疲れたぞ…はやく休みたいぜ」

フロルとガレットが会話をする、ベレスはこの長おさを探して一人で
さっさと上の階へ続く階段を上り始める。

「おい二人とも追っかけなくていいのか？あいつ先に言ったぞ」

「あー勝手に先に行かないでよベレス」

三人がベレスを追いかけて階段を駆け上がっていく、夕日は地平線に段々沈んでいきやがて夜となった二十回辺りでちょうどその時刻、^{おとこ}長と思わしき人物には会えなかった。

ここの住民に話を聞くとそういった人物は特にいないらしく三十九階を越えた辺りに居住区がしばらく続いているらしく問題さえ起こさなければそこで空いてる部屋を好きに使っていいらしい。結局彼らが行き着いた先は五十三階タワーの真ん中より少し上の階だった、そこに十分な空き部屋があったそこに彼らは活動拠点を置く事にした。

「高いなあ落ちたらどうなるんだろう?…」

ベレスが窓から下を見る海面に月明かりが当たっていて輝くとっても綺麗、ヘレンがアタッシュケースからノートパソコンを取り出して現状を整理する。

「えーと、これからやることは【機関】のデータベースにハッキングして人工衛星を通しての”楽園”の探索か…あいつら私なしでロケット作れるのかな…?」

ほんの少しだけ【機関】に残してきてしまった作業員たちが心配になる。ガレットはすでに寝息を立てていたフロルは持っていた銃の手入れをする、良く見るとまだ水滴が付いていて錆びの原因になりかねない。

ベレスは刀を布でよく磨いて鞘に入っている水をとんとん、と地面に叩いて落としていた、明日の予定としてはヘレンのノートパソコンを【機関】の電波とつなぐ事その為の機材集めだ。

「さあて私はもう寝るわね」

「私もそうしよう」

ベレスを残して他の三人は寝てしまった。

「早いなあ…みんなそうだ折角だし屋上に行ってみよう」

屋上へ駆け上がるベレス、屋上にはヘリポートがあったその中心に立って空を見ると満点の星空が光り輝いていた。今の寒い季節は空気が落ち着いているのでよく星の姿が見える。

「確かお父さんが、この宇宙のどこかに僕たちと似た文明を持って暮らす人々がいるってよく言ってたな…戦争が起こる前はきっと人類は宇宙を目指してたんだろうなあ…綺麗だ」

輝く星を寝転んで見ていたベレスはそのまま屋上で眠ってしまった。

宮座頭数騎さんが書いてくれた主人公のベレスです

←

> i 2 7 2 9 0 — 2 9 1 <

4人の行く道（後書き）

いい感じにまとめられたのかそうかは分りませんが、今回は頑張ったほうだと思います。

女装して潜入しやがれ!! (前書き)

ベレス…世界を旅する少年、よく女の子に間違われる 遺伝子が他の人間とは作りが違う【アウトサイダー】

フロル…白いコートを着た綺麗な姿の【アウトサイダー】の少女、以前はマーモットと呼ばれていたが、【機関】を抜けた際名前を捨てた

ガレット…元【ギルド】のボス、とっても怖い顔をしてる筋肉ムキムキ

Dr. ヘレン…いろんなことをしってる。戦闘もできる、治療もできる女性。

ホーネット…【機関】の人事を取り仕切ってる、フロルと同じくらいの歳、陰湿な性格で人の不幸を喜ぶ。

【ギルド】…無秩序を楽しむ集団、世紀末ヒッパリーな格好をしている。

【機関】…地下に大都市東京を再現している、楽園を追い求めてその力で外の世界へ出てもう一度暮らそうと願っている多くの人々の集団だが、裏では世界制服をしようと企んでいる。

【アウトサイダー】…【機関】が外で暮らす人々を呼ぶ時の一般的な総称

女装して潜入しやがれ!!

夜の闇がなくなって朝日空高くが昇る、屋上で寝ていたベレスはその光を直に浴びて目が覚める、口を大きく開けてあくびをして両手両足を伸ばすと屋上を降りていく。

「昨日あのまま寝ちゃってたのか…」

階段を降りて他の三人がいる場所まで走って行く、そしてドアを開けるとすでにみんな起きていた。ベレスはみんなにおはようと一言、それに三人が揃って返す。フロルは窓の外を双眼鏡で見っていた風が吹き込んで白いコートと銀髪が綺麗に揃ってなびく。

「あのビルのあたりね、コンピューターとかの機材が沢山あるわ。」

それを聞いたヘレンがそのビルを見る、そしてベレスにあそこに行けと指示を出した。

「まあいいけど…遠いなあ必要な物は？」

「アンテナ用のUSB端子と無線機だ」

サングラスのレンズを吹きながらそういった、ノートパソコンを開くと【機関】の極秘ファイルにアクセスして、今後の一ヶ月の【機関】の各部署に分かれた予定表らしきものを見ていた。修理をしていた人工衛星の打ち上げが今から丁度三週間後を刺している、今の目的はその人工衛星からの撮影を傍受すること。傍受した映像に”楽園”が写っていたらその場に向かう、とっても単純でうまくいけば【機関】よりも先に”楽園”の入手ができる。

「ガレットは？」

「下の階に降りてここの住民から周囲の情報を聞いてるよ」

「そう…戦闘以外で役にたった事ないけど大丈夫かな？」

「さあな」

一方その頃のガレット

「なあ、ちょっとあんたこの辺りについて詳しい人間はいないか？」

「うわあ！！くるなあ！！変態！！」

変態扱い、上半身が裸であることとその顔をみんな怖がっていた…貫禄ではなくただの変態と強面が故に他人からの言われなき拒絶を受けていた。屈辱という言葉よりも悲しみがこみ上げてくる。そして数分後三人の元へ戻ってきた。

「で、結局なにも聞けなかったと」

「すまん…」

ベレスに詰られるガレット、大の男が女の子と見間違うくらい可愛い主人公に完全に上から目線で説教をされていた、驚く事に二十分間もしかられっぱなしだった。

「ベレス次は私がいくからもういいじゃない」

「了解：頼むよ」

フロルがガレットの変わりに住民にこの辺りの情報を聞きに言った、下の階へ降りていくと余りの美しさに住民の男たちの大半が釘付けだった、数十分後。

「なんか恥ずかしがってみんな話してくれないんだけど…」

「…まあ仕方ないね」

ベレスの脳裏に浮かぶ一言「この二人：社会に向いてないというか…他人に耐性がないのか？」そして次にヘレンに行ってくれと頼む。

「えーやだ：私はここで情報の整理をしたいんだ」

「まあいいか僕だけまだ何もやってないし」

ベレスは階段を下りてゆく他の住民たちはガレットやフロルが降りたときとはまったく違って落ち着いた様子だった、子供たちが中央のホールで縄跳びをして遊んでいたり、大人たちは何気ない会話をしている。しばらく住民たちの様子を良く観察してから暇そうな人を見つけると声をかけた。

「すいません、こちら辺り一帯の土地に詳しい方を探してるのですがそういった方に心当たりはありませんか？」

声をかけられた男性は背の低いベレスを見つめてしばらくすると席を立ちしゃがんで答えた。

「そうだな、こちら辺のことは俺が一番良く知ってる…だから俺に

聞いたのが一番正解だ」

「そうなんですか！ 僕たち昨日ここに来ただけでまだ良く分らない事ばかりなんです。これから自分たちの目的の為に機械が必要なんですけどその機械を取るに当たって向こうのビルに行きたいんですけど入り口はどこら辺にあるとか、気をつけたほうがいいこととかありますか？」

男性は紙に地図を描いてベレスに渡したそして最後に一言。

「気をつけてなお嬢ちゃん」

「あ、僕は男です」

「えええええ！」

という見ず知らずの人間からよく言われる一言に軽く返した後、階段を駆け上がった他の三人が待つ場所に向かった。三人のうちフロルとガレットは部屋の隅っこで落ち込んでいた。

「二人ともどうしたんの？」

「放っておけそれよりも情報は集められたのか？」

うん、と一言ヘレンにベレスは告げると男性が書いてくれた地図をヘレンに渡した。ヘレンはその地図の紙の隅っこのほうに書いてある注意事項を読み上げた。

「注意その1、電気ケーブルがむき出しになってる部分があるため感電に注意」

「注意その2、機械を運ぶときはゴム手袋をすること」

「最後の注意、ビル内は女性専用のため男性が入ると射殺される」

最後にフランケンシュタインもびっくりな奇妙な注意事項が書かれていた為、ベレスはゾツとする。しばらくしてから部屋の隅っこで落ち込んでいるフロルに声をかけて機材の回収を頼む。

「嫌よ…どうせ私たち二人は怖い人間よ」

ヘレンがノートパソコンを閉じて背伸びをしてからベレスに近寄るところを告げる。

「住民が話をしてくれなかったから二人は怖いと思われてるって勘違いしてるんだそつとしといてやれ」

「あ、っそう」

ガレットはともかくフロルは別に怖くはないだろうとベレスは思う、そしてヘレンがアタッシュケースからよくわからない機械を取り出して分解して改造し始める。

「ベレス私はまだやることがある、女装でもなんでもやって向こうのビルに行けよ」

「女装って…やだよそんなの」

その言葉に反応したフロルが隅っこから立ち上がってベレスに近寄り肩を両手で掴み輝いた瞳で顔を見つめる。

「大丈夫、ベレスならどんなお洋服も似合うから」

そしてベレスを羽交い絞めにするそのまま別の部屋に連れ込んでしまった。ベレスが連れ込まれた部屋はとても綺麗で大きな鏡があった、さらに装飾品がそこら中に飾られている大きなシャンデリアまで天井からつるされている。フロルはクローゼットを開けるとフリフリのフリルが付いたワンピースを取り出した。

「まずはこれから試して見ようかーベレス」

不適に笑いながらフロルはベレスに近寄る。

「ひえええ…ギャー!!」

数時間後、綺麗なドレスを身にまとったベレスが現れた。ワンピースは純白でとっても綺麗、ベレスの赤毛とのミスマッチがとってもいい。

「予想外だ：素質はあると思ってたけどまさかここまでとはな」

「でしょうーベレス良く似合ってるよーこっちみてえ！ねえほらガレットいつまで落ち込んでるの？見てごらんよベレスを」

「…感無量！！」

鼻血を噴出して倒れる筋肉モリモリマッチョマンの変態男、ヘレンはアタッシューケースからカメラを取り出してフラッシュを炊く、フロルはただ見つめているだけ。

「うわあやめろお！見るな！！写真撮るな！！」

「ベレス潜入先は女性専用の多分危険なビルなのよ：言葉も今よりちょっと改良したほうがいいわね」

数十分間女口調の勉強をフロルからみっちり教わった。ある意味、結果完全な女の子となった。むかしから言うこんな可愛い子が女の子の訳がない！！

そして昼が過ぎて午後になった頃、赤毛の美少女もとい男の子が階段をゆっくり降りてゆく姿があった、住民たちの視点からは時が

一瞬ゆっくりになったような感覚と良い香りのベレスが通過していった。

「あの子?…」 「お前声かけろよ」 「いや、無理無理!!」 「みんな顔だな」

ベレスは見とれている住民たちに優しく微笑みかけてごきげんようと声をかける。

「天使だ!」 「…綺麗」 「こっちみたぞ!」 「いや俺を見たんだ!」

そして女装をしたベレスは更にしたの階へとゆっくり降りて行くそして水中へ白いワンピースのまま飛び込んでいった。

「ベレスの普段着ってさ、断罪○ミラ○ダ？かしら？」

「さあ？そのネタが分る人間がいるかどうかすら分らないな」

女装して潜入しやがれ!! (後書き)

ベレス君かぁいいよかぁいい!! 鼻血が
W
W
W
W

女装して潜入しやがれ!! その2 (前書き)

ベレス..世界を旅する少年、よく女の子に間違われる 遺伝子が他の人間とは作りが違う【アウトサイダー】

フロル..白いコートを着た綺麗な姿の【アウトサイダー】の少女、以前はマーモットと呼ばれていたが、【機関】を抜けた際名前を捨てた

ガレット..元【ギルド】のボス、とっても怖い顔をしてる筋肉ムキムキ

Dr. ヘレン..いろんなことをしってる。戦闘もできる、治療もできる女性。

ホーネット..【機関】の人事を取り仕切ってる、フロルと同じくらいの歳、陰湿な性格で人の不幸を喜ぶ。

【ギルド】..無秩序を楽しむ集団、世紀末ヒッパリーな格好をしている。

【機関】..地下に大都市東京を再現している、楽園を追い求めてその力で外の世界へ出てもう一度暮らそうと願っている多くの人々の集団だが、裏では世界制服をしようと企んでいる。

【アウトサイダー】..【機関】が外で暮らす人々を呼ぶ時の一般的な総称

女装して潜入しやがれ!! その2

ベレスが水中にもぐった頃の同時刻、機械の右腕を持った【機関】の一人の男が地上に這い上がった日の光を見ると醜悪な笑みを顔に浮かべて歩き出した。彼の右腕は以前フオルにもものすごい勢いで蹴られもげてしまった為の義手だった。

「マーモット…借りは返すぞ」

男の名前はホーネット、機関の人事を勤めながら他人の脳に干渉する能力を持ったベレスたちの宿敵。

ホーネットは握りこぶしで義手の右腕に力を込める。地上に這い上がって早速敵と遭遇したようだ。どこかの世紀末のような格好をした【ギルド】の連中がホーネットを取り囲む。

「頭ねじ切っておもちゃにしてやる!!」

釘が打たれた木製のバットを振り回しながら襲いかかる一人の人間、ホーネットは右腕の義手を突き出す。

「すこし試して見るか、起動!! トランスフォーム!!」

義手の変形してトゲトゲとしたアンテナの様なものが出る、そして彼の能力が発動される。アンテナは彼の能力の欠点である標的の頭に触れなくては脳に干渉できないという欠点を補う為にある、唯でさえ戦闘に卓越しているのにこのような機能が付けばそれは、まさに鬼に金棒。

「うぐ!! 体が!!」

「なんだ！！うごかねえぞ！！」

「あ、頭がイテェ！！」

ホーネットの醜惡な笑みが更に自分の口角を歪める、悪魔のような顔へとなって標的の自由を奪う。そしてついに【ギルド】の連中は悟った、人間が相手できるような者じゃない本物の悪魔が目の前で自分たちの命を軽くもて遊んでいると。

「じゃあまず、お前は自分以外の奴を殺せ」

ホーネットに襲い掛かろうとしていた一人の人間の体が勝手に動く、後ろを振り向き足が勝手に動き出す身動きの取れない仲間への暴徒が始まる。声にならない悲鳴が響き渡り撲殺される仲間、原型をとどめない姿を見て更に恐怖が伝染する。

「だれかああ！！たすけてくれええ！！」

「次はその助けを求めている奴だ、殺せ：ひゃーっはっはっは！！」

時が流れてやがて操っている人間だけになる、醜惡な笑みのまま彼の脳への干渉を解く。彼は泣き崩れてホーネットの顔を見る。

「なにが望みだ…」

「真の破滅だ」

そう言って懷から銃を取り出して、目の前の彼の心臓を撃ちぬいた。後に残ったのは撲殺された死体と銃殺の死体と醜惡な笑みを浮かべ

れ笑うホーネットだけだった。

「ぶうはぁ！！結構遠いなぁ…こんなに泳いだの初めて」

ベレスが目的の浸水したビルにたどり着く、内装はかなり綺麗に手入れされていて光り輝いていた。まるで戦前のその前からそのまま攻撃されることなく残っているような感じすらした、水面から這い上がる。ベレスはもぐる前にヘレンに持たされた無線のイヤホン交

信装置を耳に付ける。

『聞こえるなベレス』

「良好だよヘレン、機材が窓から確認できる位置まで移動するね」

『気をつけろよ、くれぐれもボロが出ないようにな』

注意を黙って聞くベレス。

彼は男の子だけど、どこからどの様にしてみても女の子…もともとそうだったけど、今回はかなり女の子いわゆる「男の娘」なのだ、だけど刀は佩いている。

「新入りかしら？女の花園へようこそ。」

水面から這い上がったところで横からいきなり声をかけられて慌てるがすぐに落ち着いて挨拶を交わした、相手の女性は腰にリボルヴァー式の銃を吊っている。おそらく自分たちが根城にしたタワーと同じ

警備員のような役割をしているのだろう。

「服が乾いたら上に上がってきて、みんなに合わせるから」

「あ、はい…：みんな？どのくらいの人数かなあ？」

男性が入れば殺される、そんな危ない場所にわざわざ白いワンピースできた自分が急に恥ずかしくなるベレス。三階のテラスに出て日の光に当たって服が乾燥するのを待つ、建物は高層マンションのようになっているが一階から六階まではエントランスホールで中央部分が吹き抜けになっている。しばらくして服が乾燥したのでテラスを

出る。

「上、上に行く階段はここかな」

階段を駆け上がっていく途中ヘレンから通信が来る。

『ベレス詳しい位置が分った目標は二十階の東側の部屋にある』

「了解…」

通信が切れる。

上の階に上がると階段が途絶えていた丁度六階だった、ベレスは困った顔をして六階ホールをうろうろしていると、突如ファンファールが鳴り響いた、歓迎の音頭のようなのだ。

「ようこそ、あなた名前は？」

「ベレスです」

戸惑いながらも答える、こんな歓迎を受けている暇ではない二十階にいつて機材を取りに行かなくてはならないのだが、女性たちはお構いナシにベレスを触ったりつついたりしている。

「刀だあかっこいい…」

「ベレスちゃんて言うの？あなたすごく可愛いわねえどうしたらこんな白い肌に」

「胸はあんまりないのね…貧乳はステータスよ」

なにやらだんだんピンク色のオーラがそこらじゅうから溢れてきているような感じになっている、女性の良い香りに包まれたベレスは困った顔のまましばらく硬直。

「困ったな…これじゃいつまでたっても目標回収にいけないや、それに上に上がる階段すら見つからない」

『仕方ない奴だな、いいか今から私の言う通りにしろ』

無線で聞いた言葉でベレスの顔が真っ赤になる。

「あのみなさん歓迎してくれるのは嬉しいんですけど私、実は」

「なに？」

「まさか…」

空気が一瞬凍りついたように冷え切ってしまう、そして深呼吸をしてベレスは言う。

「私、今日…女の子の日で具合が…」

「やっぱりねーどうも元気がないと思ったらそういうことか仕方ないわね、みんなベレスちゃんの歓迎会は今度にしましょう」

その場を思いっきり恥ずかしい言葉で乗り切るベレス、それと同時にヘレンに対するちよっとした感謝とか怒りとかいろいろベレスの中で渦巻いていた。しばらくして上に上がるにはエレベーターが一つ起動してるのが分ってそれで二十階まで直行目標物の目の前まで辿り着く。

「ふうようやくだ、とりあえずゴム手袋をしてっ」と

「あなた男ね…」

背後でリボルヴァーのハンマーが、かちやりと音を立てて鳴る…狙われた。

ズドン！！

女装して潜入しやがれ!! その2 (後書き)

まだ続きます…はい

女装して潜入しやがれ!! その3 (前書き)

ベレス..世界を旅する少年、よく女の子に間違われる 遺伝子が他の人間とは作りが違う【アウトサイダー】

フロル..白いコートを着た綺麗な姿の【アウトサイダー】の少女、以前はマーモットと呼ばれていたが、【機関】を抜けた際名前を捨てた

ガレット..元【ギルド】のボス、とっても怖い顔をしてる筋肉ムキムキ

Dr. ヘレン..いろんなことをしってる。戦闘もできる、治療もできる女性。

ホーネット..【機関】の人事を取り仕切ってる、フロルと同じくらいの歳、陰湿な性格で人の不幸を喜ぶ。

【ギルド】..無秩序を楽しむ集団、世紀末ヒッパリーな格好をしている。

【機関】..地下に大都市東京を再現している、楽園を追い求めてその力で外の世界へ出てもう一度暮らそうと願っている多くの人々の集団だが、裏では世界制服をしようと企んでいる。

【アウトサイダー】..【機関】が外で暮らす人々を呼ぶ時の一般的な総称

女装して潜入しやがれ!! その3

銃から轟音が響く。

「え、わあ! キヤ! !」

ベレスは前を向いたまま銃口の方角を手で弾き変えて、弾を回避そしてすかさずそのまま腕の関節を取ると地面に相手を倒した。手から落ちた銃を蹴り飛ばす。

「騒がないで下さい、殺したくありません」

相手の首筋に日本刀の刃を突きつける、相手の肩が少しだけ震えるのがわかる。

「人を殺そうとするくせに、自分の死は覚悟はできてないんですか
…。」

ベレスは呆れて押さえつけてた関節の拘束を解くと日本刀を腰の鞘に収める。そして耳に付けてる無線機で通信を始める。

「目標を回収した、戻る」

『そうか、なるべく早く戻れよ』

女性は関節を押さえながら立ち上がって吠える。

「まて！まだ帰すわけには…」

「面倒な人だな」

ガレットから習ったテコンドーの回し蹴りで女性の頭を打撃、攻撃を受けた女性は蹴りの勢いで吹っ飛び壁に激突、そのまま気絶した。それと同時に警報が鳴り出す。下の階にいた女性たちの半分くらいがベレスの場所に駆けつける。

「何事！！」

良く見ると女性が激突した壁には火災警報装置のボタンがあった、そこにあたった為警報になった。

駆けつけた女性の一人が気絶している仲間の姿を見て、即座にベレスがやったと判断。

「あなた何てことを…」

気絶していた女性が仲間によって起こされる。

「そいつは男よ！！、さっきの歓迎のときに股間うっかり触ったんだけど…」

「やーい痴女」

「うるさいお前は女装変態野郎だろうが！！」

痛いところを突かれた、ベレスも好きでやっているわけではないが他人から見ればそう思われても仕方ないことだった。それならばこ

これから早く脱出していつもの服に着替えたいところだろう。
女性の一人がふと思う、本当に男かしらと？

「あなた本当に男なの？ 完全に見えないわ」

「そうですね、一応男です…」

「ならなんの目的で？ここに」

「仲間の為にですよ、仲間は家族みたいなものでね」

女性たちがひそひそ声で話し出す。

「ここ一応男は殺すって掟だけど、どうする？」

「いやあでもあの場合には…殺さなくとも、かわいいし」

数分後。

「いますぐ出て行くなら見逃す…そして最後に聞きたい」

「なに？」

「どうしたらそんなに可愛くなれるの？」

「知るかそんなこと…生まれつきじゃないんですか？ 生まれたときからブスな奴はブス、かわいい子は可愛い子になるんだと思います」

よ。
」

ベレスの一言は明らかに女性に対する侮辱やいろんな意味合でムカつく一言だった。女性同士では時にえげつない争いが起きるらしいが、こういった場合はどうなのだろう？ほとんどの女性がその場でムカついたが怒りをこらえて我慢した：ベレスが可愛い子供にしか見えなかったからだ。

数十分後、ベレスはアジト帰ってくるとゴム手袋ををはずしてヘレ

ンに指定された機材を渡した。渡されたヘレンはサングラスを外すと早速ノートパソコンの改造を始めた。【機関】の通信や映像を傍受するためのルーターを即席で作り上げノートパソコンに内蔵した。

「あ、お帰りベレス」

「フロル…ただいま、ガレットは？」

「昼寝してる」

耳を澄ませてみると隣の部屋からかすかな鼾が聞こえてくる、若干うるさい気がしてくる。さらに寝言が聞こえてくる。

「うー…ベレス甘えんなよ…」

それを聞かれてるとも知らずに寝言は続くといったどんな夢を見ているのだろう聞いていると段々R-18な方向になってきたのでベレスは日本刀をガレットのケツにぶっさして来た。

「アッー！！」

「この変態！！」

いま白いワンピースを着ている女の子のようなベレスが言ってもドMには「ありがとうございます」の一言で返されてしまいそうだ。ガレットが寝ている部屋を出てフロルに話しかける。

「僕の普段着はどこにやったのフロル」

「…もうしばらくそのまま置いてくれない？」

「却下」

しぶしぶクローゼットからフロルはベレスの普段着を取り出して渡す。

「ふむやっぱりこの断罪○ミラル○の服が一番だ」

「やっぱりそうだったんだ…」

夕日が水平線の向こうへ沈んでいく頃、ヘレンの顔が真っ青になった。最悪の事態が起きている事が判明して全員に報告した。

「あいつが来る！！生きてやがったんだ！！」

「まさか…」

「ホーネットだ…：現在地は幸いまだ遠い…」

女装して潜入しやがれ!! その3 (後書き)

もうそろそろもつとシリアスな感じにしたいなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5486u/>

Desperado World

2011年10月9日09時03分発行